

送持本願念集

南無阿耨陀佛 往生之業

道綽禪師立聖道淨土二門而後聖道心歸

安樂集上三問曰一切衆生皆有佛性緣起

值今人佛何因至今仍自輪迴生死不出

依聖教長由不得三種勝法以排生

五
月
號

見本

淨土

陸海軍
病院

慰問浄土

全國の陸海軍病院に月々新刊の信仰雜誌「浄土」を贈つて白衣の勇士の方々に法味を愛樂して頂くために、この運動を始めてから既に二ヶ年になりました。その間全國津々浦々から赤誠の籠つた御援助を頂き既に五千二百余圓の御寄附が集りました。延數にして十萬冊以上の浄土があらゆる軍病院に贈られ、勇士の方々から大變よろこばれてをります。多數の感謝の言葉が寄せられました。その意義については最早贅言を要せぬこの聖なる運動にはなほ多數の御參加をお願い致します。

白衣の勇士に法味を捧げよ

- ◇全國陸海軍病院の全部へ毎月三十部乃至百部の雜誌「浄土」を贈呈して白衣の勇士達に法味を捧げてをります。
- ◇一口一圓二十錢の浄財を御喜捨下さい。それによつて一年間毎月雜誌が病院へ参ります。
- ◇毎月五千部以上は是非入用です。少くも五千人の有志者が必要です。御奮發下さい。
- ◇個人でも、團體でも、亦金高が一口以下でも結構です。兎も角この聖き運動に隨喜參加して下さい。
- ◇御送金は浄土宗務所事務部宛に！ 領收の證には宗報誌上及び「浄土」に御芳名を掲載します。

新發賣

一日一球で健康量

理研製品



肝油を精製した
純ビタミンAD

肝油が効くのはビタミンAとDの爲だと判つてゐる今

日、魚油のまゝの肝油で我慢する必要はありません。本品は肝油から精製抽出したビタミンAとDを無味無臭のグロビュール球に収めた快適な製品——肝油の効果は完全に数十倍に強化され且快適化されました。

合理的な新製品

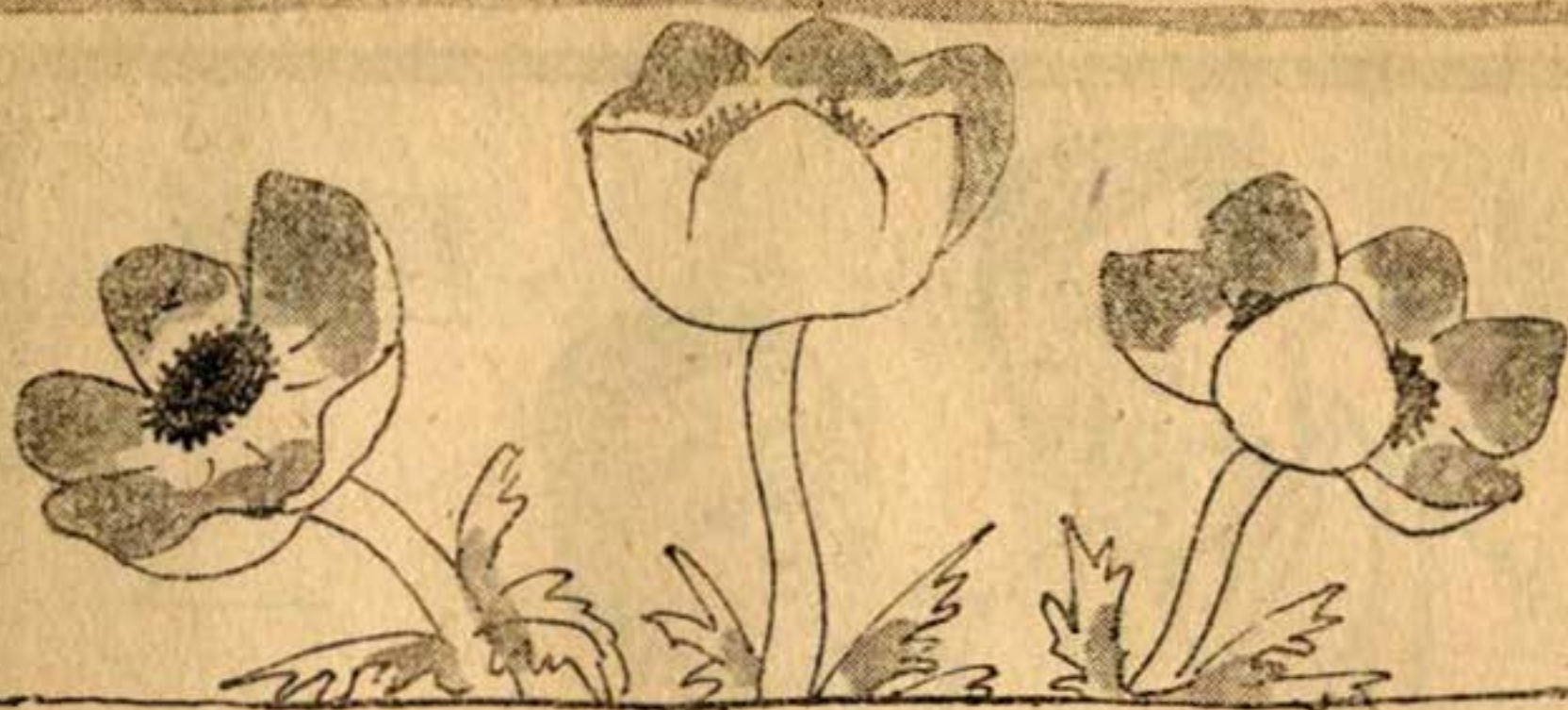
新製品理研ビタミン球は、最近のビタミン學說に據り、一日二球づゝ服めば完全に生理的健康量を満たせる様に、一球ビタミンA五千D一千國際單位を含有させた製品。しかも青豆ほどの小粒です。

一月量 六〇球 二圓

品切の節は總代理店へ

總代理店
株式會社
玉置商店
振替東京七二番

理研 ビタミン 球



淨土五月號目次

扉繪・目次カット……………鈴木金平

東洋の微笑……………佐藤賢順（二五）

托鉢の姿……………吉田絃二郎（六）

隨野の呼び聲……………吉水辨道（四）

筆春の昆虫……………町田徳治（元）

念佛一つ……………中野尅子（四）

信

仰

相

談

……………中村辨康（元）

信仰
史實

俊乘坊重源……………村田常夏（三）

（大羽
四郎畫）

中支
風景

部落を歩……………米倉隆從（二〇）



信 仰 の 店……………本誌記者(四)

佛典 童話 金色の獅子 (齋藤 清 畫)……………内山憲尙(四)

小説 空見の仙太郎 (鈴木 金平 畫)……………小島健三(二)

歌 壇……………與謝野晶子選(二)

俳 壇……………太田耳動子選(三)

心經 講話 乗り切る苦難 中村辨康……………(五)

信 仰 座談會 死後は何うなる……………淨き友の會(五)

天津 だより 日華共修念佛……………瀧澤遵道(三)

淨土宗讀本廣告……………(四)

編輯 後記……………(四)

淨土五月號目次……………

東 慈 道 著 眞野正順師序

病める兵の手記

四六判二五〇頁 定價一圓二十錢 送一四

若き宗教學徒東氏が、年老いた母と若き夫人といたいいけな二兒を残して應召したのは昭和十三年の晩秋であつた。寺院に住まぬ僧侶東氏の唯一の苦惱はその日からの家族の生活であつたと思ふ。而し彼の泰然綽々たる態度は平生と何ら變る所がなかつた。

年少苦難の人生行路は宗教家としての自覺と相俟つて若き聖者の風貌にも似た彼の人格を礎き上げたのだ。今やこの最高峻烈な試練の門出に於て、それが遺憾なく示されたと言ふ事が出來よう。從軍年餘、遂にたはれて異境に病む身となつた彼が病床四十度の高熱と闘ふこと月餘、今更に死と宗教と、友情と恩愛と、常識人としての彼が、死をみつめつゝ如何なる常識を絶した體驗を感得したであらふか。

言ひうべくくんば、これは又、若き求道者が歩んだ人生三十年の記録であり、死への抗義である。戦争と死と恩愛を語る今事變が生んだ最高峰である。戦線銃後の慰問書として是非お求めを!!

これは三上卯之介上等兵の戦線彈雨下に於て得た貴重な血の體驗スケッチである。
三上氏は又漫畫界の新進氣鋭を以て知られてゐる。
戦地への慰問品として又前線勇士を偲ぶよすがとして必ず座右に!!

八隅部隊工兵上等兵
三上卯之介作

陣中漫画 瘡風 三上

内容一般
口繪(オフセツト色刷)姑嬢、支那兵、支那の子供、決死隊其他數點
陣中川柳、壺中書、漫文、ヒゲマンガ、一等兵、戦線ハガキ、通信野戰病院、戦地スケッチ、等々

定價 一圓二十錢 送一四
四六判 二五〇頁美本

發行所 東京 市口 四座 谷東 區京 新宿 一七 八〇三 八番 會社 資社 三友社

淨土

五月號

弓箭の家に生れたる人、たとひ
軍陣にたゝかひ、命を失ふとも
念佛せば本願に乗じ來迎に預ら
んことゆめゆめ疑ふべからず。

法然上人御法語





托鉢の姿

吉田 絃二郎

武蔵野を歩く人たちはこのころあちこちの櫟林や松林が惜し気もなく伐り倒されてゐるのを見出すであらう。都會の境域が擴められてゆくために麥畑は道路となり、山は崩されて住宅地となり、赤い瓦や青い屋根のきはめてプチ・ブルジュア的な住宅が見出される。

わたくしの近くでも耕地整理といふ名目で縦横に道が切り拓かれて、方々の櫻や松が容謝もなく切り倒されてゐる。書齋にこもつてゐても時折り木の倒れてゆく音を聴いてはつと胸を突かれるやうな氣にもなる。裏の竹山の一部分が整理されることになつたので、樹齡三十年ばかりの櫻と山椿を移すことにしたのは去年の暮の

ことであつた。冬は雨も雪もすくなかつたので案じてゐたが、先づ山椿が花を見せ、つゞいて櫻がほころびはじめて來たので、よいことをしたと思つた。モンテーヌは「われは人間よりも木を愛す」と言つたが、わたくしにもその心持ちがわかる。

裏の竹山が切り取られる時人々は「切つておしまひなさい。櫻も椿も移植しても駄目ですよ」と言つた。しかしわたくしは「駄目なら駄目だよ。ともかく手をかけて見て、それで駄目ならその時はあきらめます」と答へた。

「木にだつて魂はありますよ。三十年も四十年も生きてゐた木を切り倒すのは可愛想です



よ—と言つても人々はわたくしの言葉を充分に飲み込むことはできなかつたらしい。

木に魂なんかないといふ人には、木は何も訴へて來ないであらう。しかしわたくしには木の魂が感じられる。

魂をこめて刻んだ佛師の仕事には魂が生きてゐる。その仕事に魂を感じることもできない人にはどのやうに尊い佛の姿も訴へては來ない。

わたくしは毎日裏の竹山の片隅に移し植ゑられた山椿や櫻の下に立つて花を眺めてゐる。花も笑ひ、わたくしも笑ふ。お互に生きのびたよろこびを感じ合つてゐる。

それにしても毎日このごろの武藏野には老木が地響きを立て、切り倒されてゐる。老木の慟哭でなくて何であらう。佛師たちは刻まれた木のために供養をすることを聞いた。武藏野に切り倒されてゆく老木のために供養する人はいないであらうか。

ウイリアム・モリスはわれわれの都市或は村

の道一筋を通すにしても、都市または村の美的觀點について考へなければならぬことを論じてゐる。一本の木、一本の草についても考へなければならぬ。武藏野では幾何學的に、便宜本位ののみ道を作ることのみが考へられて、幾百年の歴史を無残に破壊してゐる。かつて東海道の松並木を伐り倒した知事があつた。恐らく明治時代の皮想な科學萬能の思想に育て上げられた人であつたであらう。

たゞ一本の老松がいに村人の生活に美を與へ、魂の休息を惠むかを考へなければならぬ。これと同じ意味で藝術的な寺院やさゝやかな辻堂の持つ美的役目も輕視することはできない。

ロシヤの小説や物語を讀むと、草原を旅する人々の生活が書かれてある。日も日も單調な草原の旅がつゞく。見るものといつては雲と地平線のみである。夜は盜賊の群を警戒しつゝ、草の中の天幕に眠らなければならぬ。このやうな旅が二十日三十日とつゞく。突然地平線のかなた



に金色の迦藍の丸屋根が日光を反射してゐるのを旅人等は見出す。その刹那の旅人の歡喜は想像することが出来る。

恐らくそこに住んでゐる神父たちの説教以上に、その金色のドームは大きな魂の慰めをあたへるであらう。

旅する人々は疲れたる眼にたま／＼汽車の窓から町や山上の寺院の屋根を見出すことによつて慰めをあたへられるであらう。

日も暮れかゝつた旅の空であの均齊と落ちつきを持つた、そして無限の高さにあこがれつゝ翱翔してゐるやうな寺院の高い屋根を見出したばかりで、静寂觀を見出すのはわたくし一人ではあるまい。

掃き淨められた山門をくゞる刹那わたくしたちの心も淨められる。淨境に在る間だけでもわたくしたちは淨心を見出してゐる。一步門を出れば俗人であるかも知れない。しかし山門をくゞつてゐる間だけでも脱俗の人であるといふことはありがたいことである。

形といふものは大切なものである。

京都へ旅して三條、五條あたりの大橋の上でたま／＼托鉢僧を見出すことがある。心のうちでひそかに拜みたい氣持になる。無論托鉢僧の中にも煩惱になやみつゝ托鉢してゐる人もあるであらう。しかしあの姿、あの形にはわたくしたちをして充分心の裡に禮拜せしむるに足るものが潜んでゐる。

わたくしの友人で劍道の奥義を究めたといはれる程の男があつた。その友人がかつてこんなことを語つてゐた。

「梅幸くらゐの人が、たとへば土蜘蛛を踊つてゐる際には切り込まうとしても一分の隙もない」と。

普段の梅幸は隙ばかりの人であつたかも知れない。しかし舞臺の上に立つた刹那劍客の前に一分の隙をも見せはしない。形の持つ嚴肅さである。

魂は形を變化させる。しかし形も亦魂を變へ得る。



魂を忘れた形式は無意味である。しかし形の持つ力も亦忘れてはならぬ。

×

ブラウニングに「ピツパア過ぎゆく」といふ詩がある。

ピツパアといふ無心の小娘が工場の休み日に朝早くから街をうたひながら歩いてゆく一日のことを書いたものであるが、ピツパアは美しい聲で何の考もなしに歌をうたつて行くのである。

たま／＼通りすがりのピツパアの美しい唱歌を聴いて大迦藍の奥の聖も、人を刺さんと決心してゐた志士も、可憐な戀人を捨てようとしてゐた青年も驕然として心を改めるといふ筋である。ピツパアは自分の唱歌がそのやうな感化を人々にあたへたことなどは夢にも知らず、一日の幸福な休み日を遊び終つて工場にかへつてゆく。

またブラウニングに父と子が殺し合ふほどに

争つてゐる刹那に聖誕祭の鐘の音がひびいて来て、先づ父の心を柔らげ、つゞいて父と子が仲直りをして、幾年振りかではじめて人間らしい聖誕祭の夜を迎へることが書かれてある。

一小娘の可憐な唱歌、非情の鐘の音ではあるが、人間の運命を左右する力を持つてゐる。尊い機縁は何處にも潜んでゐる。客を待つために門前を掃き浄めることも時として説教以上の大きな仕事となることもあらう。無心に歩いてゐる托鉢僧の姿そのものが時として説教以上の役目を果してゐることもあらう。

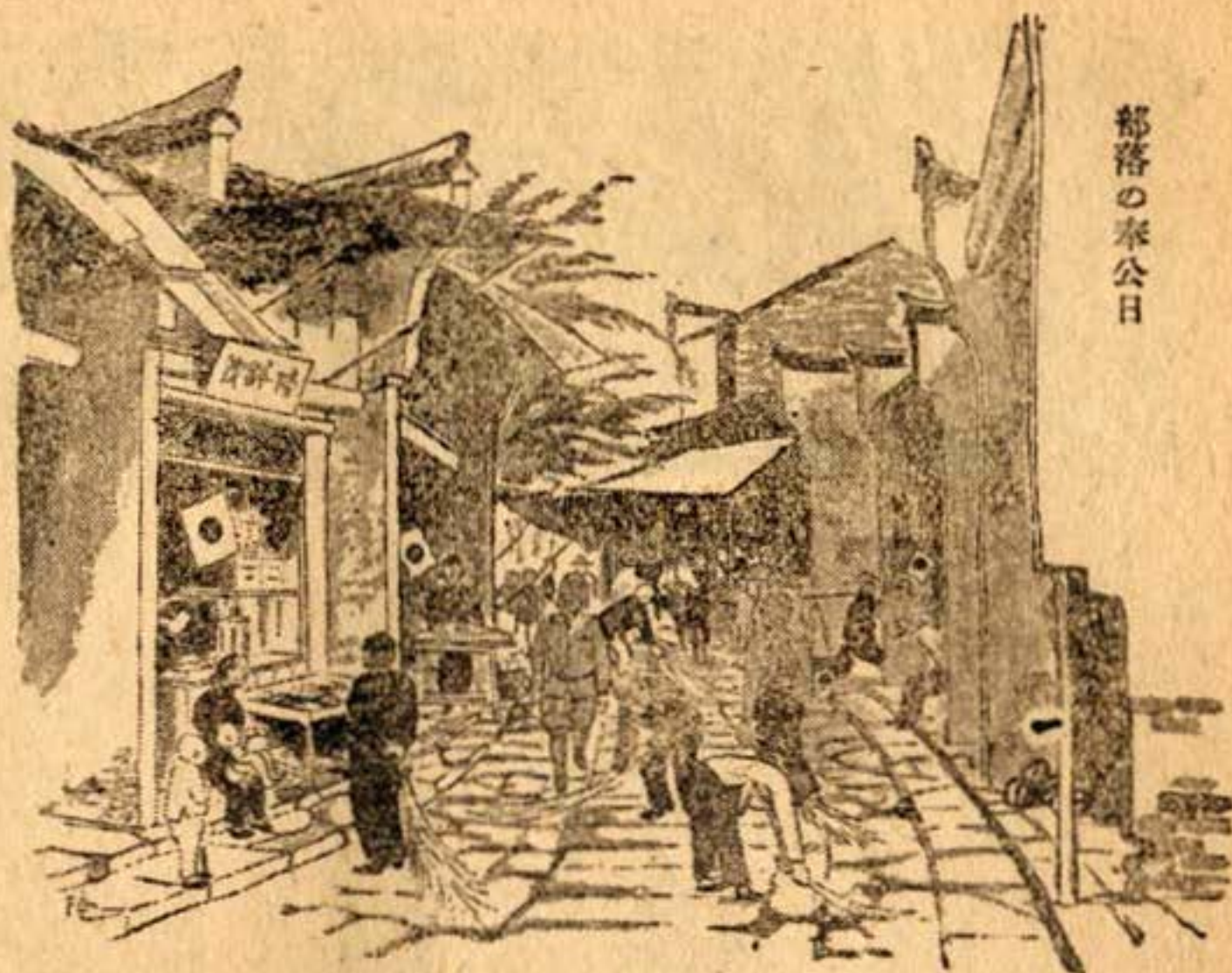
人間は生きてゐる間いろいろな恩恵をいたゞいてゐるが、同時に正しい形、正しい心に生きてゐさへすれば何かのお役に立てさしていただくこともあらう。

*

*

*

部落の奉公日



中支の風景 部落を歩く

米倉隆 従

(文と畫)

でも可成り大きく見え、それが小高い丘の上にもあると城壁のやうに見える事がある。

道路は例外なしにみんなせまい、

(これは家が五六戸位しか無いやうな小部落でも、不思議と通行路はワザと狭くしてある)、敷いてある石畳は大い凸凹で、左右の家の棟は高くひさしや日覆を無遠慮に道路の上

何々鎮とか云ふ様な支那の田舎の小邑に行つて見ると、大い一筋の長く延びた曲りくねつた道路でなりたつてゐる。家は皆高い壁で出来てゐるので、側面から見ると小さい町

に突き出して赤、藍、黄等の旗や看板を雜然とブラ下げてその町の中心地には近在から出て来る物質の露店が並び、用があるのかないのかのべつに人が行つたり來たりして茶館

にはいつも人がたてこんでゐる。夏になるとその混雜の中へ日覆を突き出しテーブルを持ち出し、お茶を呑んだり麻雀をやつたり、茶館の延長で時には交通の妨害になる様な事がある。そしてさういふ中に街頭理髪が出てゐたりする。町の汚い事は勿論で、蠅が盛んに飛び交ひ、ゴタ／＼してゐる間をぬつて豚や毛の抜けた見苦しいやせ犬がウロ／＼してゐる。そして不潔な臭氣が町中に什滿してゐる。しかしかうした不潔も一度び皇軍が入つて警備につくと日ならずして清潔となり、やゝ整頓され、不潔な香りも或る程度まではなくなつて了ふのである。それは宣撫班や警備隊

の指導と、時々大掃除をやらせるからで或る部落では毎月一日と十五日の二日を奉公日と定めこの日は部落民が自發的に町の道路やその週廻を清掃する事になつてゐる。汚い事が平氣で公共の事なぞ考へないらしい彼等が大ぜいで箒を持つて道端をはいたり、共同便所へと云つても穴に大きな甕をいけて板を二本渡しそのまわりを簡單に櫛でかこつただけのものやゴミ捨場に石灰を撒布してゐたりするのは可成りほゞ笑ましい風景である。しかも一と處を五六人がゝりで、ノンビリやつてゐるところは如何にも彼等らしくて面白い。筆者が滞在した事のある部落は、随分清潔につとめたが、附近を流れる川を長い間不潔のまゝにしておいたと見え、どうにも腐敗した水の悪臭が去らず、閉口してゐる内に、こつちの方で馴れて了つたのには、一同苦笑したものであつた。

支那は古い國だけに何處の小邑に行つてもこんな貧弱な處にと思はれる位、身分不相應に立派な寺院(廟)が二つや三つはきつとあ

る。しかし多くは無住に等しく荒廢し、ひどいになると町の市場になつたりしてゐるも

かけてゐたり手がもげてゐたり衣のシワにほこりがたまつてゐたり、満足なのはメツタにない。寺の中の目ぼしいものは長年の間に持ち去られて了つたらしく、はげた棟の繪畫や、ところまだらにかけ落ちた彫刻や、達筆にかゝれた文字の額

など、幾星霜の年月を物語つてゐる。中にはその結構装璜だつた昔をしのばす様なものを見る事もある。此等、本殿に孔子を祭ると大成殿と云ひ、佛陀の像を安置すると大雄殿と云ふ。それから關帝廟もなか／＼多い。この廟には眞赤な顔をして額に八の字をよせて右手で、長い鬚をひねつてゐる關羽の像が、參詣者を眼下にニラんでゐる。衆知の様に支那は水が悪いので、いゝ水の出る所には、土民は一種の信仰を持ち、さうした所には龍王廟を祭つてある。

かうした田舎町で土民の生業を見て歩くのも面白い。揚子江にそゝぐ支流



或る破れ寺

のもある。安置さ

れてあるいろ／＼の像は木彫か漆喰

ひでいづれも極彩色であるが、鼻が

の入口等にある物資の集散の活潑な所ならば尙更である。筆者が好んで立止るのは薬屋の店頭である。日本製の薬もチラホラ見る事が出来るがそれより、その道のマニアが見たら花瓶や置物にサゾ慾しがらうと思はれる様な薬を入れた壺である。形は様々で、焼方にも亦いろ／＼である。薬の名を書いた赤い紙が貼られ、いくつもの棚に整然と並べられてある。その内のどれか一つ持ち歸つて花瓶にして見たいと思つた事も幾度かであつた。交那人は死ぬ前に棺を造るといふ。その棺の立派さは一つの見得でもあるかして實に大したものである。長さ六尺位、巾二尺五寸位で木の厚さは十センチぐらゐである。この職人は澤山の木をつなぎ合せてセツセと作つてゐる。出来上つたのを持ち出すのを見てゐると五六人位でかついでゐるのである。彼等はこれを黒塗りにして金で模様をつける。貧民だと思へる所にも、こんな職人が生業してゐる。粉屋はロバや牛にめかくしして廻り臼で粉をひかしてゐる。そばに赤子を抱いた女房

や、小供がねむさうにひかへて時々むちで尻をたゝいてゐる。

直径一米位のいくつかの平たい箆に、白い四角いものを並べて賣つてゐるのは豆腐屋である。水の中に入れてある日本のとくらべるとなるとなくマツさうである。

製麺屋は人通りの多い店頭で切つたそばを乾しながらのぼし、たがひにくつつき合ふのを長い箸ではがしてゐる。饅頭屋はせいらいで蒸した饅頭を店頭に並べ、清潔を重んずるのは、鼠色になつた布で覆ふてある。この饅頭は、ねぎや肉や砂糖等、中に入つてゐる物によつて大てい形を變へてある。

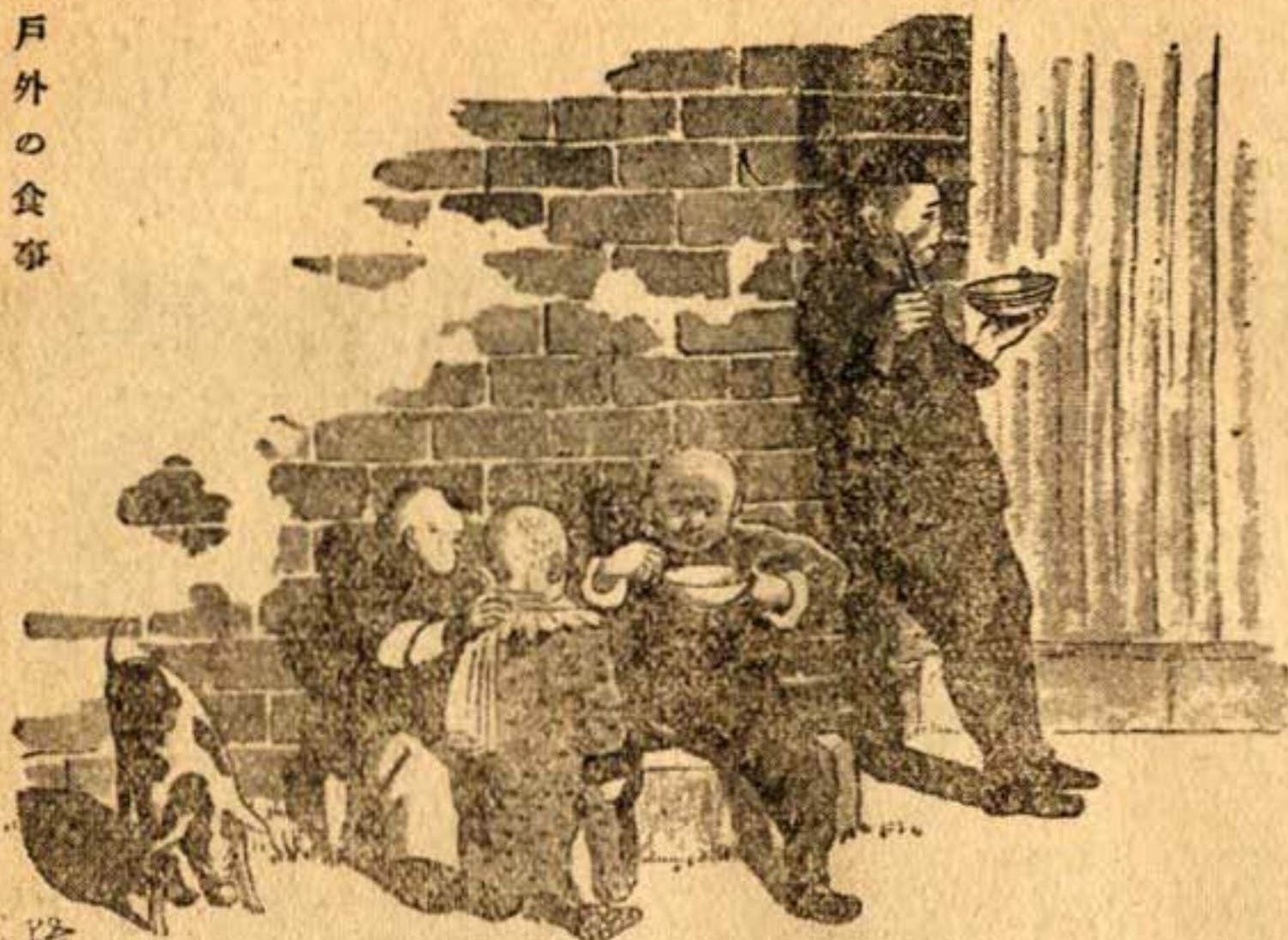
酒飯兩便と書いた家の中では大てい幾人かの人等が表を見ながら食事をしてゐる。そして店頭にはすでに料理された食物が皿に盛られ並べられ、大きな平たい鍋には何やら得體の分らぬものが油で煮られ

豚肉屋



てゐる。氣になるのは天井からス、がブラ下つてゐる事であるし、これらの商品にはみんな鯉がたかつてゐる。鯉か本當か解らないが

戸外の食事



蠅には二種あつて食物にたかる蠅は汚くないのであるといふ事を支那人は信じてゐるといふことである。

面白のは豚肉屋である。熱湯をかけてスツカリ毛をむしり取つて、奇麗にし眞二つに切つた豚とその臓物を店頭

に丁度、日本で見える古着屋の様に下げて大きな庖丁で切つてはハカリにかけて賣つてゐる。この二つ切りの豚が十も十五も並んでつり下げられてゐるのは、それが豚だけにユ一モラスでもあり、また一寸壯感でもある。このつり下げられた豚の間から時々賣手が顔を出すのも亦珍な風景である。

これらの部落を歩いて見て、恐ろしく行儀の悪い事だと思ふのは、彼等士民共が老若男女を問はず、何處でもかまわず、人の見える様な所で食事をする風習である。家の入口にテーブルを持ち出して外を見ながら食つてゐるのは、まだ腰をかけてゐるからいゝとしても、道端へ出てそ

こら中歩き廻つたり、立木や家の壁によりかゝつたりして食つてゐるかと思ふと、小さな子供が自分の顔位もある大きな茶碗をかゝへて、道路のマン中へ飛び出して來て食つてゐたりする。女房らしい色の黒い女が戸口へ出て來て飯をかつこみながら、なにかわめいたりしてゐるのはよく見かける圖である。警備隊の通譯に聞いて見ると、飯が食へるといふのは一つの見得でもあるといふ。

淨き友の會

信仰座談會案内

(五月例会)

一、日時 五月十二日午後七時(第二日曜)

五月廿六日午後七時(第四日曜)

一、會場 東京市本郷區東片町七八

橋本方(電小石川四九七六)

一、講師 中村辨康先生

一、議題 一紙小消息(續講)

淨き友の會幹事

野の呼び聲

隨筆



らは南風ですぜ」

「ほんになア、やうやくこちのら
世界になつて來たなア」

農夫達が畑道で行き合つたらしく
挨拶するのが聞えて來る。青く晴れ
た大空の下で、どつかと、土に腰を
下ろした農夫ほど、自然の中に溶け
込んだ生活はない。天地人、といふ
が、地にびつたり一つになつた生活
に、はじめて天の意味がある、だか
ら農夫達の生活は、地の生活で、同
時に又天の生活である、彼らの生活
には、三粒雨が降つても、或は三日
天気であつても、其の影響する處外

のものとは違ふのだ。

「おのしの大根もか、うちのもモウ花が咲い
て來たよう」

同じやうなことを言ひ合つて分れてゆくら
しい、彼らの、まるで土から抜けて來るやう
な挨拶を聞くと、何のことはない、彼らは自
然と腕組みをしてゐるやうな感じがする。

坐して、凝つと此の早春の不思議な「音」に
耳を傾けてゐる。

——音は、色ともなれば光ともなる、と科
學者はいふ。して見ると、眼を閉ぢて耳に入
る音は、眼を開くと共に色彩に變るのかも知
れない。

「いゝ陽氣になりましたなア、今日は午後か

眼を閉ぢると、ゴーツ、といふ音が耳に入
る、奈落の底へでも落ち込む音かとさへ思は
れる、松風？ 薄雪？ 何の音だか定かには
分らない、眼をあげて見れば何にも無い、さ
ては自分の耳鳴りかと疑つて見たが、さうで
もない。

今私は、自坊の庫裡の、陽のあたる縁に鑑

今、早春の太陽は燦々として野に山に輝き
みちてゐる、然し、どこことなく風が寒い。

明日はお節句

山崎善一

「マアもう寝るの」

「ウン鯉轡をよそゆきにするんだい」



「御免下さい」

突然に誰か訪ねて来た、あはて、玄關へ出て見ると、全然見知らぬ人、其の人は名刺を一枚出して、

「——どこか此の邊に貸別荘のやうなものは
ありませんか、實は今門前で此方へうかが
へば分ると聞いてまゐつたのですが」

「どういふ御事情なのですか」

「いや、實は家内がわづらひまして、静養か
たがた一二ヶ月此の邊へ御厄介になりたいと
思つて、今日は突然思ひ立つてやつて来たや
うなわけですが」

「あゝさうですか、貸別荘は幾軒も空いてゐ
ます、今直ぐといふわけにはゆきませんが持
主と交渉して見てあげませう」

其の人は、いろ／＼事情を並べて、通知の
あり次第細君をつれてやつて来るからといひ
をいて、やれ／＼安心したといつたやうな顔
を見せて歸つていつた。

都會といふ偉大な怪物に、散々に叩きのめ

されて、意地にも我慢にもゐたたまらなくて
逃げて来た、といつたやうな様子だつた。

挨拶の言葉なんかも、今裏の畑で農夫達の
交した聲とは、似ても似つかない、カサ／＼
した聲だつた、まるで地にもつかず、天から
拖かれもせず、コロ／＼風に吹き轉がされて
ゐるやうな感じがした。

——なぜこんな感じがするのだらう？

お、忘れてゐた、あの不思議な音、ゴーツ
といふ音、私は再び眼を閉ぢて、凝つと耳を
すました、聞えない、はてな、たしかに先刻
宛然と此の耳へ入つた音だつたが、して見る
とそら音は止んだのかな？

私はこんなことを思ひ出した、——よく身
心の鍛えられた、いはゆる名人といふやうな
人になると、眼で見なくとも、耳で聞かなく
とも、物象が方數十間の内に入れば、よいこ
とも、悪いことも、其のまゝビシツと身心に
ひびく、といふ——。

たとへば、鯉聖といはれた柳生宗矩が、晩

年劔をすて、大和柳生の庄にあつて悠々自適の春を樂しんでゐた頃、一日しづ心なく散る櫻の花に興を催して庭に出てしきりに歌なぞ口吟んでゐると、何心なく後に従つた見小姓が、フト思ふともなく「今かうしてゐられる處へ、不意に後から切り付けたら、如何に名人の殿様でも、其の太刀をかはし得られるだらうか」と考へた、すると、今まで無心の宗矩が、俄かに四邊に眼をくばつて、態度緊張、らん／＼たる氣魄が全身に溢れて來た、と、何思つたか其のまゝそゝくさと室に入つて了はれたことがある。此のことは後で分つた話だが、見小姓の心にフト浮んだ殺氣が、直ぐ宗矩にビーンとひびいたためだつたといはれてゐる。

徳本行者なんかにもかういふことは度々あつたやうだ、行者が高座で説教してゐられると、俄かに風が起つて、あはや高座の上のものを吹き飛ばしたかを見ると、行者はちやんと風の來る前に飛ぶものゝ始末をしてゐられたといふことである、誰が見ても風が起る寸

前に其のことを察知せられたとしか思はれなかつたさうである。

近頃人が、全然眼に見えないに拘らず、まるで眼で見えてゐるやうに教へる、紫外線、ラヂオ、宇宙線——。

音だつて、われ／＼の耳に入らない音が無數にあるのはいふまでもない。

▽

私の近所に「道」といふ啞者がゐる、生れながらの啞者で、彼計りは音の世界から全く除外されて了つてゐる、さぞ困るかと思ひの外、一向平氣で、いや耳から音が入らなくたつて身體全體で音を體感するのかと思はれることである。音を觀るとも感ずるともいはれるやうだ。直感といふのは、一枚につながら世界だから、音波の中に身體全部が潜つてゆくと見える。

——聞えない音、見えない色、それは必ずしも名人でなければ、高德でなければ、觀ずることが出來ないものとは思はれない、平凡な農夫だつて、或は啞者だつて、彼の心が素

直に自然と溶け合つた時、そこにはきつと自然と一枚になつた世界があるやうだ、これはむしろ、平凡な農夫であればこそ、啞者であればこそだかも知れないけれど——。

およそ、生きて物の動くのは、いふまでもなくそれは音である、否もつと遡つて、生きようとする意志がすでに音であらう。

早春の野に出て、一握の土塊を握り起して見ると、其處にはモウ無數の生命が、やがて土の上へ這ひ出さうとして仕度を整へてゐる。

野原の隅を流れるホンの帯のやうな小川でもよい、一寸のぞいて見ると、水草の裏、小石の影、そら其處にはう／＼と生命が、やがて水の温む日を待つてゐる。

——あのゴーツ、といふ不思議な音、それは早春に甦る生命の音なのだ、さうだ、生きよう、生きてゆかう、生きねばならぬ、さういふ天地の叫びが、たま／＼無心になつた私の耳に入つたものに相違ない。



札幌 押野 尚秀

わが汽車が狩勝峠越えつればいよ
よ遠けき君と想ほゆ

評 聖の歌は難かしいもので、火のやうな言葉を並べてもその心をよく傳へないものがあるが、この作などはつつましく抑さへた心持で、よくよく深い思慕の情が仄かに表現されてゐる。格調もまた美しい。

京都 春風

父母と大涅槃像拜むとき墓底の山
に鶯の啼く

評 孝子となつて、今日一日を父母に侍して守まゐり、春日遍々として外は鶯の啼くうちからかきである。親子の心のどこである。

岐阜市 國廣 松樹

骨を削り草をはみても堪へてあら
んこのみ戦のはてなん日まで

評 國家非常の大難がただ掛聲や觀念でなく、この作者のやうに、切迫した實感となつて、現はれることを望む

山梨縣 岩間 久次

歸還せる戦闘帽の兄朗ら、稲田の
畔に母と語れる

徳島縣 海部 山人

海啼れて潮の香高し二羽の鳶ゆる
く輪をかくのどかなる春

館山市 安田 保治

鳶の輪のかげ移りゆく砂山の裾な
だらかに海に續きつ

大坂市 森 正勝

鉢の蹴つぽみ持てりと母上の喜び
給ふ傍らに侍す

小樽市 中村 茂樹

夕せまる海のかなたに浮ぶかな墨
繪の如き半島の影

京都 望月 久次郎

知恩院のおん忌の鐘のきこゆなり
櫻にかすむ圓山を越え

小樽市 中村 もん

離れ住む忙しさに馴れ大陸の子ら
思ひつつ地圖眺めけり

満洲國 藤原 吉雄

月光は敵も味方も荒野さへひとし
く清くてらすなりけり

東京 三浦 順子

枯野べにわづかに摘し蕪草父の忌
日の餅にまゐらす

銅路市 伊藤 領子

雪止まば水を汲まんと思へども霞
白き雪を踏むはいたまし

香川縣 荒木 はち

樂しきは友らと花を奪ねつつ思ひ
のままに歌を詠む時

北海道 花田 國住

惜しみてもあまりありけりなす事
の猶多かりし君を送りて

北海道 寺田 誠山

大いなる佛の慈悲に泣かされて唱
ふる偈の聲あはれなり

熊本縣 小原 ミサ

み佛と共に生きゆく身と思へば強
き力と喜びの湧く

朝鮮 羅江 八年坊

大いなるみ空のさまを眺むれば生
くるわが身の不思議深しも

靜岡縣 一向 山人

山村の役を引續ぐ法羅貝の夕餉の
臈に聞え来るかな

大坂市 松尾 いく子

さくら花手紙に入れて送りけり佳

木斯にとどく時のまたるる

神戸 李 城 東

朝日照る祖國を後に船出して望む
中華の空また遠し

東京 奥山 まさ

佗び住ふここにも春の訪れてうら
うら咲けるさくら花かな

京都 秋 暹

暖ひに荒ふる心なごめとて慰問袋
に萬葉を入る

熊本縣 小原 タミ

うらうらと縁朋え立つ春の野に母
と雛菜を摘みし日遠し

熊本縣 萬法 云海

梅咲ける翠屋の軒の出征旗風には
ためく山裾にして

東京 梓 穂子

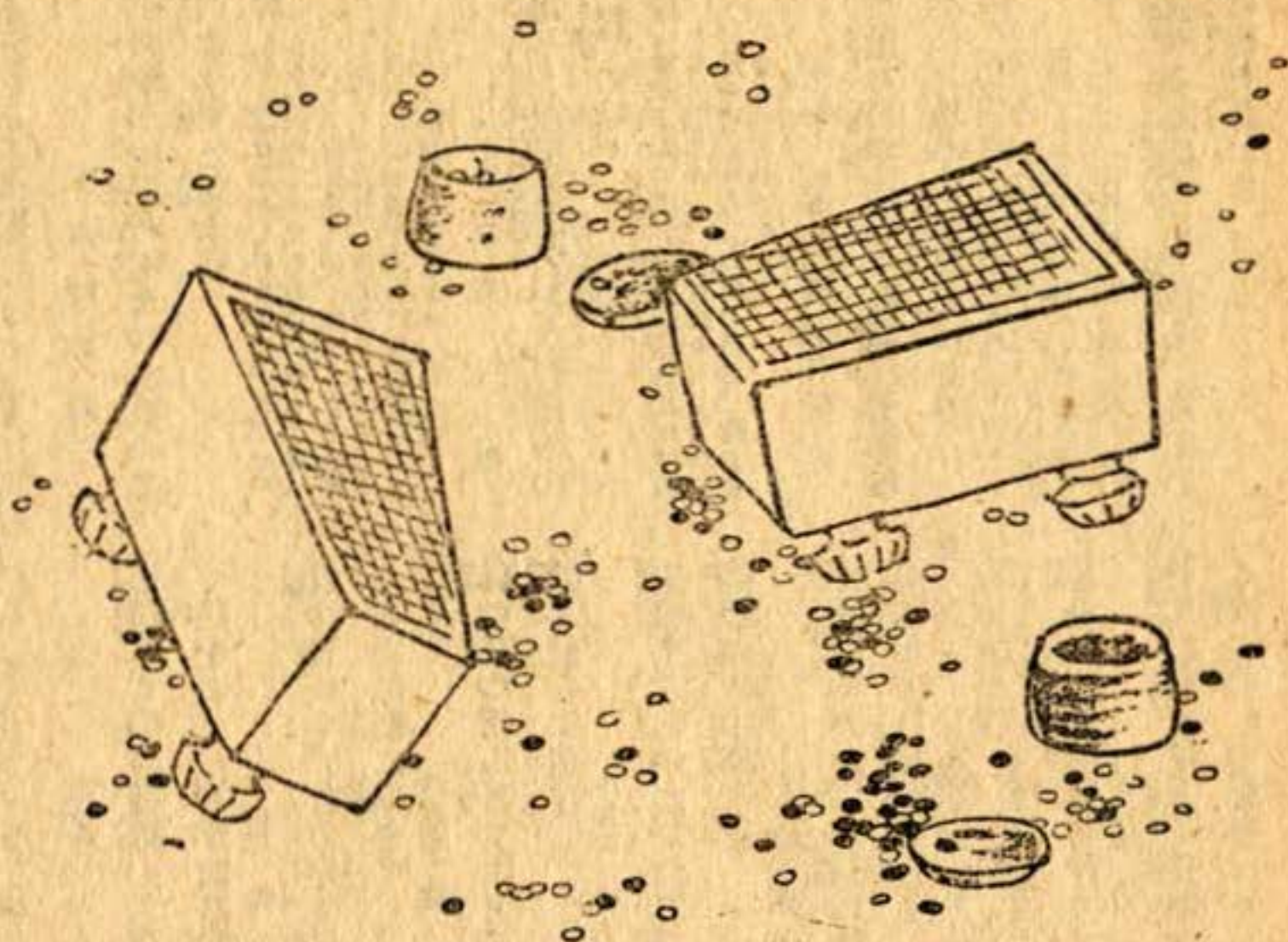
思はずも夜を更かしけりたたかひ
の庭に擧げん品を揃へて

東京 小泉 妙春

鶯の初音たづねて谷間なる藥家
の軒に日の旗を見る

投稿規定

はがきに一回二首以内とし
「淨土」編輯部歌壇係あて
に送ること。



||||||| 小説 |||||

空見の仙太郎

小島健三
鈴木金平畫

盤わりの忠言

まことに困つたことには、御船奉行の加藤惣兵衛は碁が好きでした。碁が好きだから困るといふ理由ではありませんが、近く藩主鍋島加賀守様が、船旅をなさるのに、朝から晩まで役所へ顔を出すと相手を探して烏鷺をたゝかはしてゐます。

それですら用がたりません。下役の者が駈けつけて、相談をして、うわの空で返辭をします。

下役は、相談をした通り準備をすると、その翌日、大變な叱言をうけます。

さうやつてゐるうちに、船旅の日が、近づいて來ます。

『加藤様——』

碁をたゝかはしてゐるところへ、空見の仙太郎が言葉をかけました。

空見の仙太郎といふのは綽名で、本名は本多仙太郎といふ立派な名があります。ところが、この鍋島藩が誰ひとり本多仙太郎などと呼ぶ者はをりません。

みんな空見の仙太郎、空見の仙太郎と呼んでゐます。これは、加藤惣兵衛が、朝から晩まで碁をやつてゐるやうに、仙太郎は朝から晩まで、いや、夜中であらうと夜明けであらうと、空ばかり眺めてゐるところから、空見の仙太郎といふ綽名をつけられたのです。

『何んぢや?』

惣兵衛は、顔もあげずに聞きました。

『碁を止めて頂きたいのです』

『碁を止めてと……ね……』

もう碁に魂を奪はれてゐますから、仙太郎のいふ事など耳には入つても、心に徹しません。

ばかり——と石を降して『う……』と、呻つてゐます。

まことに困つたお船奉行です。

『藩主の御船出も明後日でございます。加藤様には、この變りやすいお天氣が氣にかゝりませんか?』

仙太郎は、眼に涙を泛べて諫めました。仙太郎はお船係です。

一日中空と睨めツこをしてゐるのも、自分の職務に熱心だからです。帆船ですから、その日の天氣具合を誰よりも早く識らねばなりません。その日、その日の空模様を、自分の生命として生きてゐる仙太郎です。

そこへゆくと、惣兵衛はまつたくの怠者でした。

『變りやすいは敵の陣と……』

まだ碁に夢中になつてゐます。

『加藤様、碁を止めて下さい』

火を吐くやうに仙太郎は叫びました。

これには惣兵衛も驚いて、

『うるさいツ』

と、嗚鳴りながら、はじめて仙太郎を見ましたが、その時、弾かれたやうに、

『あつ!』

と、聲を呑んだのです。

まつ蒼になつた仙太郎は、ぐツと碁盤を右手で引寄せ

と、ざらり碁石を盤に拂ひのけ、抜く手も見せず、

『えいつ!』

烈帛の氣合もろとも、碁盤をまつ二つに斬つてしまひました。

そのするどい氣魄、ダ、ダツと空に舐ねあげた碁盤が、自激流免許皆傳の腕前で、鮮やかに斬られて轉落した物音に、

『はつ——』

と、惣兵衛は息づまつたのです。

仙太郎はと見ると、一閃した刀を鞘に納めるがいなや、ばつと下座にさがつて、

『何卒、無禮の段平にく御容赦のほど願はしゆうござります』

上役に對し非禮だとは思ひましたが、眼ざめるやうな荒つばい事でもしなければ、怠ぐせが癒らないと思つた仙太郎、思ひ切つて忠告をしたのです。

惣兵衛は、暫らくの間、眼を白黒にして驚いてゐましたが、下座に平伏してゐる仙太郎をぢろりと眺め、のけぞつてゐる今迄の碁相手を見た時、むらくと怒りだしました。

『仙太郎、無禮であらうぞツ』

『はつ——無禮の段は、幾重にもお詫び仕りまする。なれど、藩主の御船出も明後日、萬ヶ一船仕度に手落がありましたは、御奉行ばかりではなく、船係一同切腹をしても申譯が立ちませぬ。その大事な御船出を前にして、碁遊びなどは、もつての外と存じまして、非禮をかへりみず御諫み申上げましてござりまする』

『う……吹けば飛ぶやうな御船係の分際で、拙者は……拙者は……』

貴様などの忠告はうけん——』

まつたく意外な言葉でした。

惣兵衛は、仙太郎が手むかひをしないと見ると、自分の怒りに油を注ぎ、

『刀で碁盤を斬るとは、拙者へ斬りつけたも同然、う……何うしてくれよう……』

ばりく歯がみをしてゐました惣兵衛、決然と、

『手討にしてやる。それへ直れツ——』

『これは御無禮な、何卒拙者が心をお汲み下され——御容赦のほどをお願ひ申しまする』

『え、ならぬわい。それへ、なほれツ——』

叫びざま、ダツと斬つてゆきました。

しかし、惣兵衛ごときに斬られる仙太郎ではありません。ヒラリ腰を躲しながら、いきなり惣兵衛の手を逆捻あげ、

『これほど申上げてもお判り下さりませぬか。それなれば致方ござりませぬ』

仙太郎の眼には口惜涙がいつぱいでした。

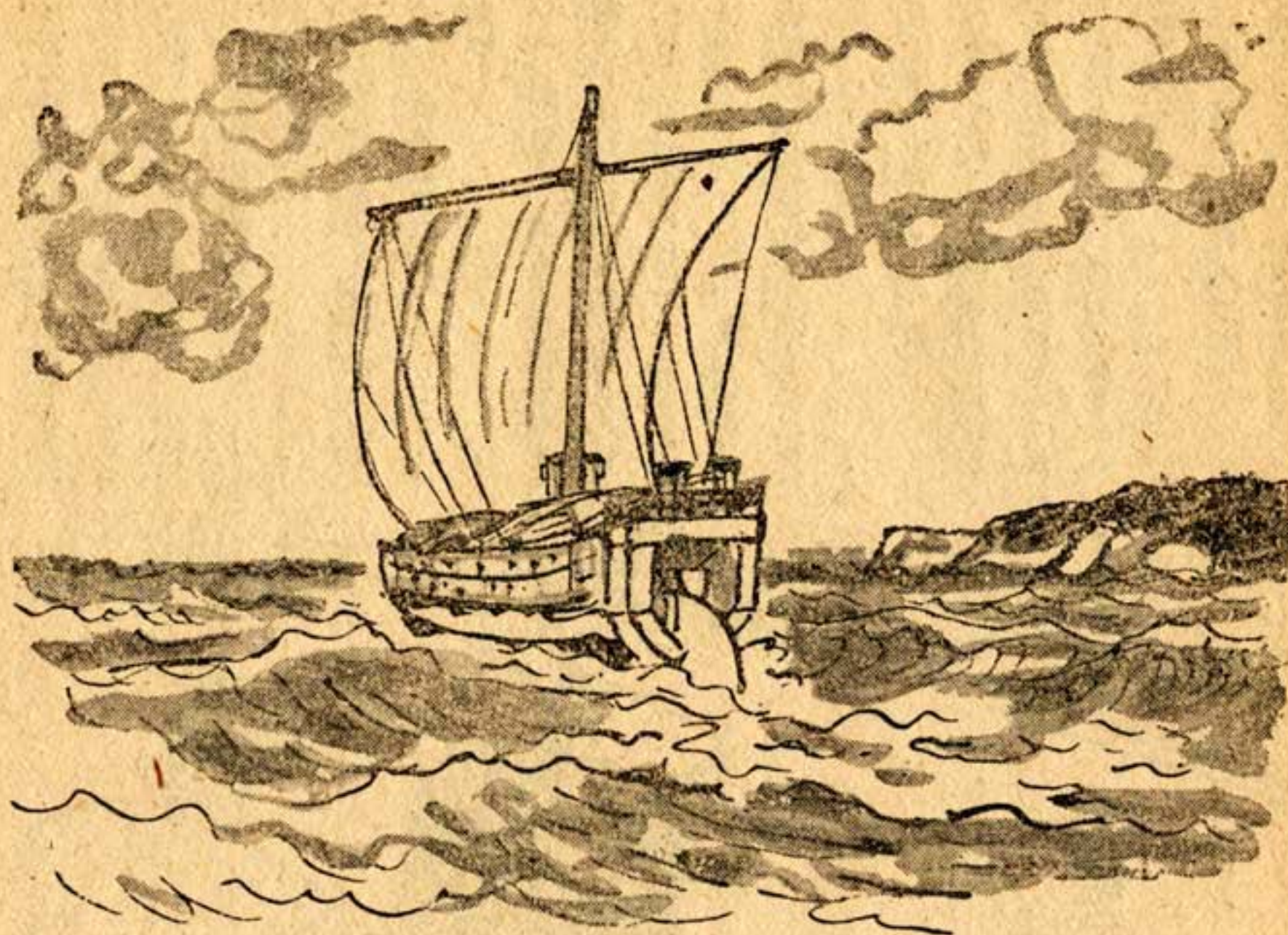
その夜のうちに、五歳になる平太郎の手をひいて、何處ともなく姿を消してしまひました。

果せるかな——藩守銅島加賀守が、船出の時、朝のうちは、氣も晴ればれとするいゝお天氣なので、加藤惣兵衛は、早速御殿に伺候して

『今日の御船出御慶び申上げまする』
 ところが、加賀守は天氣について非
 常に敏感で詳しかつたのです。『惣兵
 衛、今日の船出は明日に延ばさうと思
 ふが、何うちや』
 『それはまた、藩主のお言葉とも思へ
 ませぬ。供の者に手落でもござります
 るか』
 『いや、天氣が、何うも氣にかゝる』
 『藩主、今日は天氣晴明、今日の日を
 のがしては、船出の日はござりませぬ』
 『いや、さうではない。あの雲を見い
 あの雲の出る朝は必ず午の刻には嵐に
 なる』
 『お言葉をお返し申して誠に失禮では
 ござりますが、加藤惣兵衛御船奉行を
 勤めてをりまする。今日は決して嵐に
 などはなりません。今日の日をのがし
 ましては……』
 『いや、春の天氣は埒り難い』
 『でも、このいゝお天氣を……』



と、自信たつぷりに云つた惣兵衛の
 言葉を裏切つて、加賀守が豫言したと
 ほり午の刻には物凄く嵐になりました
 惣兵衛は、まったく面目を失ひ、自
 宅に引籠つて謹慎したのです。
 『空見の仙太郎がありア加藤様も恥を
 かゝずにすんだものをなア——』
 お船係は、口々にさう云つたのです。
 船頭の自信
 それから六年の歲月は、夢のやうに
 流れました。
 鍋島加賀守は、江戸へ参勤のため、
 瀬戸内海を船で走つてゐました。船は
 雇ひ船です。
 家來のうちには、加藤惣兵衛も雜つ
 て、いろ／＼な雑談をしてをります。
 その日のうちには、大阪川口へ着く
 豫定になつてゐます。
 この日も、非常にいゝお天氣で、藩
 主のおゆるしが出たといふので、酒宴



がはじまり、唄ふ者、踊る者、たいへんな賑はひです。

すると、急に船が騒々しくなりました。

『何りした、何か起つたのか？』

侍たちは、顔を見あはせて尋ねました。

『判らぬ、甲板へ出て見よう——』

酔ひもさめて、狭い梯子から甲板へ出て見ると、船頭の怒號する聲が、人々の耳を打ちました。

『帆をおろせい——』

まつ黒に日焼けした筋骨たくましい船頭は、氣でも狂つたやうに叫んでゐます。

『何をしてゐるかア——總出で帆をおろせい——』

鬼のやうな形相で叫びまはります。さうかと思ふと、

『高砂の入江へ着けるのぢや——お前も手傳へ、まご／＼する時ぢやアねえぞ』

この船頭の件らしい十一歳の子供まで叱られてゐます。

この騒ぎが、藩主鍋島加賀守の耳に入らぬ譯はありません。

すぐに船頭は加賀守の前に呼ばれました。

『これ、何んで帆をおろし、高砂の入江に船を着けるのぢや』

直々のお尋ねに船頭は、顔も上げずに暫し沈黙してをりましたが、やがて、靜かに、

『風が變りさうでございます』と、きつぱりと答へました。

加賀守は、あの時以來自信をもつて天文を研究してゐました。それに、西國海上も五、六度往復してゐます。

「馬鹿、この天氣を見い。うつけ者、何を見ての騒ぎぢや。かまはぬから、このまゝ参れ——」と、強い御命令です。

「は、はつ——」

恐縮した船頭は、加賀守の前を引退りました。加賀守は、いまくしさに、

「何を夢見てゐるのぢや。は、は、は、は、船頭のくせに天氣も判らぬでは心細いのう……」

加賀守は、天氣には絶對自信をもつてゐます。

「眼離しも出来ん。今夜大阪へ着けぬところぢやつた。はは、は、は、」

身體をゆるがして笑つてゐるところへ、加藤惣兵衛が、あはて、飛んで来るなり。びたりと両手をつかへ、

「申上げます。船が高砂の入江に向つてをりまする」

「何にッ——船頭を呼べッ——」

加賀守は怒氣心頭に發しました。

「おのれこの天氣に高砂の入江に着けるとは不届きな奴、もし風が變らなんだら、そちの首をはねるがよいかッ——」

火の玉のやりに怒りました。

しかし、船頭は、憶する色もなく。

「夙に覺悟はしてをります。もし風が變りませんでしたら、御殿様に

とりまして、これほどお芽出たいことはござりません。私は切腹いたします」

はつきりと云ひました。

しかし、それからものゝ一刻とたゝぬうちに突然烈風になり、それが雨さへ含んで物凄風に變りました。

船頭は、死者狂ひに船子を翻まし、船子は渾身の力で立脚き、やつと九死に一生を得て船を高砂の入江に着けることが出来ました。

加賀守は、たゞ茫然と腕組をしてゐましたが、やがて、柱につかまり座を立ちました。船頭に詫びようと思つたからです。

綱や柱につかまりながら船頭の部屋にはいらうとした時、加賀守ははつとして立ちどまりました。

船頭は、自分の件に諄々としてゐるのです。

「平太郎、今日のことをよく胸の中に疊んでおくのぢやぞ。船頭がいつたん舵を握つたが最後、誰の指圖もうけてはならないのだ。お乗りになつた御殿様は、父の舊主鍋島加賀守様だ。たとへ御殿様のお言

葉でも、船頭の信ずるところは曲げられない。命を奪られようと信ずるところは曲げられない。命を奪られようと信ずるところはより船をあやつ

るこそ眞實の船頭ぢや。よい判つたか」

加賀守は信念の爲に毅然たる舊臣本多仙太郎に心から打れたのです。それから間もなく本多仙太郎は、改めて御船奉行として鍋島家に仕

官し、改心した加藤惣兵衛と無二の親友になりました。

東 洋 の 微 笑

佐 藤 賢 順

ラファデーオ、ヘルン（小泉八雲）の隨筆に『日本人の微笑』といふ珠玉のやうな一篇と、『日本人の沈黙』といふ短章とがある。

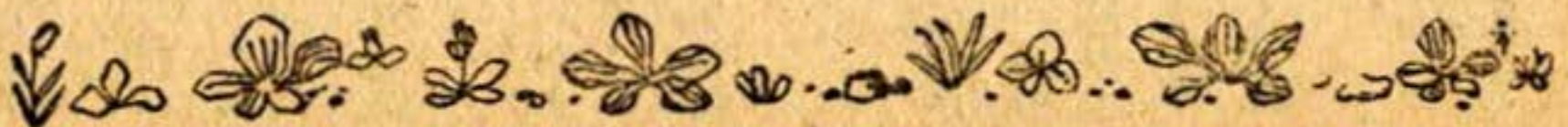
いづれも一八九〇年代の作であるが、アイルランドとギリシャとの血を半々に受けてゐるこの敏感な藝術家は、鋭い洞察力を以て日本民族性の特質をいみじくも搜し當てゐる。ヘルンが『日本人の微笑』の中で述べてゐることの二三を拾つてみることにしよう。

この一篇は英吉利と日本との民族性の比較に始まつて、英吉利人は心からシリアスであるが、日本人はそれに比べるとそれほどシリアスではないといふ。こゝにシリアスといふのは、何と譯したらよいか、生眞面目とかしかつめらしいとかでも言ふべきか、笑を忘れた、一分の餘裕もない性格を想像してみたら、ヘルンの言はふとした意味に近いであらう。シリアスでないだけに、日本人は文化的世界の中では一番幸福であるといふのである。

話は或る日本人が彼に「決して外國人は微笑しませんか、それはどうしてですか。あなた（ヘルン）を指して」が他の外國人に話しするときには微笑みもするしお辭儀もするのに、相手の人達は決して笑顔をしませんね。何故でせう。」と問はれたことに始まる。

日本人には西洋人の「怒つたやうな顔」が解せないと同様に、西洋人には「日本人の微笑」が薄氣味悪く奇怪なものに思はれる。寧ろ西洋人は日本人の微笑を輕蔑の眼を以て見るのが普通で、不誠實を表すものであると疑ひ、甚だしきに至つては、それより外の何物でもないときへ言ひ切るのである。

生涯の半ば以上を「東洋の開港場」横濱で暮らしたほどの或る西洋人にもこの微笑は不可解であつたとみえて「私には日本人の微笑が解らない。澤山の經驗の中からその一つをお話させよう。」と語つて、ヘルンに微笑の意味の説明を求めた話なども載せてゐる。



る。

——或る日、私は馬に乗つて山の手から下つてゆくと、角で空の人力車がやつてくるのに出遭ひました。避けようにも避けられず、車夫は道端の塀の方へ寄つたのですが、車の梶棒が道の方へ向いてゐて、その一方が馬の肩にぶつかつて衝き刺さつた。その男には傷はない。馬の肩から流れ出る血を見て、私はむらむらとなつて、いきなり鞭の端でその男の頭を殴つたのです。彼は私の顔をじつと視て、ニツコリ笑つて、お辭儀をしました。その微笑は今でも眼に見えるやうです。私は打ちのめされたやうな氣がしました。その微笑は私を全く當惑させました、忽ち私の怒を鎮めてしまひました。それは慇懃な微笑だつたのですよ。だがそれは何の意味なのでせう。どういふ譯でその男は微笑んだのでせう。私には解りません。——

ヘルンにもこの話を聞いた時には微笑の意味が解らなかつたが後に段々とこの不思議な微笑の意味が解けるやうになつた。日本人は死に直面した時でも微笑むことができる、そして大抵はさうである。この微笑は性格の弱さと結びつき勝ちな、病的な忍従の微笑と混同されてはならない。それは念入りに仕上げられ、長くかつて教へ込まれた禮儀作法であり、「沈黙の言語」である、とも言いてゐる。

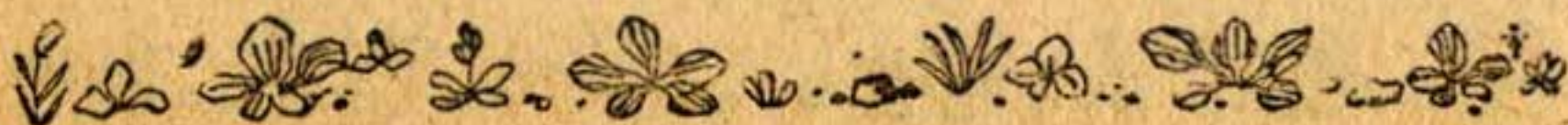
西洋人に日本人の微笑の解らなかつたもう一つの場合、横濱の

或る婦人が語る話、

——先日、宅の日本人の女中が何か大變嬉しいことでも出来たやうに微笑みながら、私の所へ参りまして、亭主が亡くなりましたから、お葬式に行きますのでお暇を下さい、と申しました。それで行かれました。遺骸を火葬にしたものと見えます。夜になると、歸つて来て、お骨のはいつてゐる骨壺を私に見せて、「これは私の亭主でござります。」と言ひました。さう言ひながら實際に笑つたのです。こんな氣味の悪い人つて、聞いたことがありますか。——

俗物でない限り、こんな場合、表情で騙される筈はない。開港場に住む外國人達は、皆、人生の表面を衝いてその深い所を見ようとはしない全くの俗物なのだ、とヘルンに言ふのである。

そこでヘルンが把えたこの微笑の神祕とは何であつたか。日本人は子供の時から、家庭に於いて、この微笑の教養を受けてゐる。微笑がお辭儀のやうに、吸ひ込む息づかひのやうに、目上に對する挨拶として、念入りの美しい禮法のやうに教へ込まれる。目上や同輩に話しかける時には、たとへて不快な場合とても、微笑みながら語るのが作法の一つである。一番氣持のよい顔は笑顔である。心の痛む時でも、健氣に微笑むのが社會的な義務とされてゐる。その道に、しかつめらしく、又は不仕合せらしく見せるのは自分を愛する人達に心配をかけるから、失禮でもあり、自分に好



意を持たぬ相手には、氣味よささうな感情を刺戟するから、愚かでもある。かりして子供の時から社會的な義務として教へ込まれる微笑は、やがて本能的になる。

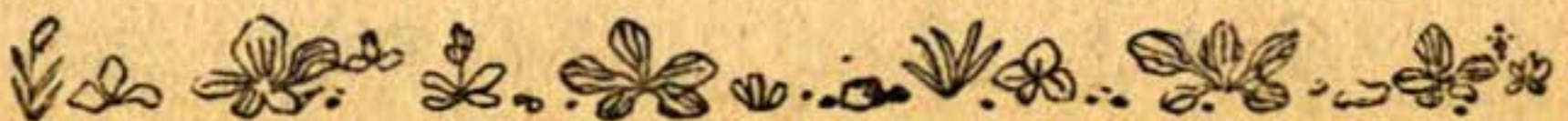
目上に對しても同輩に對しても常に笑顔で接しなければならぬといふ作法は、苦痛や不幸や死を語らねばならぬ場合でも、笑顔で語るといふ、西洋人にとつては全く不可解な、作法となる。その語る主題が嚴肅であればあるほど、微笑も一段と強まつて、時には低く幽な笑に變ることがある。死んだ人のことを笑ひながら語るといふのも、自己犠牲の極點にまで進んだ感歎なので、それは「これを不仕合せな出来事とお考へ下さいませ」ように。これほどの事で御尊厳を煩はしませんように。こんな事をお話して御心配をかけなければならぬやうになりましたことをお許し下さい。」といふ意味である。

このやうに、會話を説明する爲の微笑は、それだけとしては、作法のほんの一小部分に過ぎないけれども、それが象徵するところの情操は、より一層廣い範圍を含んでゐる。それは何であらう。ヘルンはこれを儒教や佛教が長い間に教へた自己犠牲の觀念に見ようとしてゐる。「他の如何なる文化民族の間に於いても、幸福なる生活の秘密は日本人の間に於けるほど充分には解得されてゐない。人生の幸福は周囲の人達の幸福に依る、すなはち没我心と忍耐とを我々のうちに養ふことに依る、といふ眞理は、他

の如何なる民族によつても、これほど廣くは理解されてゐない。」かやうな觀念は「個性といふ代價を拂つて」益々強められた。

ヘルンは或る夜、京都の賑やかな町を歩いてゐた。ふと或る小さい寺の門前に石の地藏様を見つけて、立停つてぢつと見てゐた。美しい童子の姿で、笑を含んだその顔は、神聖な寫實主義の片鱗を示してゐる。すると、十歳ばかりになる子供が、彼の傍に馳せ寄つてきて、地藏様に向つて小さい手を合せて、お辭儀をして、少しの間、黙つて拜んでゐた。子供は一緒に遊んでゐた友達を一寸置いてきたので、顔にはまだ遊戲の嬉しさが消え去らずにゐる。子供の無意識な微笑が、何んと「石の子供」の微笑に似てゐて、地藏様と雙生兒のやうに見えるではないか。「金佛、石佛の微笑はたゞの模寫ではない。佛教の彫刻家がこの微笑によつて象徵するものは、民族の微笑の説明でなければならない。」とヘルンは考へたのである。

この民族の微笑は菩薩の微笑——自制、克己から生れる幸福を象徵するものである。彼は例へば「たとへ人あつて戦ひて幾度か多くの敵に打ち克つとも、敵また彼に打ち克つべし、自己に打ち克つ者こそ最大の征者なり」といふ法句經の經文などを惹いて、これらが日本民族の最高の魅力となる道德的傾向をよく物語るのであると云ふ。この民族の道德的理想は鎌倉の大佛に形象化されてゐる。「その面相は深く靜かな水のやうに靜寂で、恐らくは人



間接の他の如何なる仕事も表現することの出来なかつた如き、永遠の眞理——寂靜より高い幸福はない——といふ眞理を表現してゐる。東洋の憧憬はこの無限の寂靜に向けられてゐる。

これが『日本人の微笑』で述べられてゐることの概要であつてヘルンは次第と日本的なる微笑の内包するものゝ核心へと迫るのである。

序ながら、『日本人の微笑』は、梗概を摘記するにも及ばぬほどの短章で、印象深い二つの沈黙の場合、一つは神戸へ行幸せられた陛下を奉迎申し上げる國民の沈黙と、一つは支那から凱旋する兵隊を出迎へる國民の沈黙とを擧げてゐる。(何れも明治廿八年の出来事である。)

群集からは私語一つ聞えない、一語すら聞えない沈黙である。彼がいふかつて何故の沈黙かと訪ねたのに對する答が、この短章の狙ひどころである。

「我々日本人は沈黙によつて我々の感情を一層よく表はすことができると思ふ。」

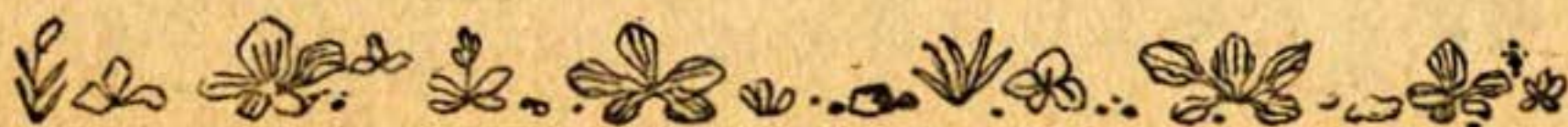
といふのが、その答なのである。日本では、快であらうと苦であらうと、情緒が深ければ深いほど、事柄が嚴肅であればあるほど、人はますます沈黙的になる、とヘルンはこゝでも東洋的な或るものに觸れてこの短章を結んでゐる。

日本品負のヘルンは日本人の微笑の神秘を捜し當てて、それが東洋の傳統的な宗教的確信に根ざしてゐることまでも明かに捉へた。然し私はこゝにヘルンの梗概を紹介するのが目的ではない。微笑が決して追従や卑屈や弱者の晦澁手段ではなく、相手の輕侮でもないことは、言ふまでもないところであるが、それはまた單なる社會的、階級的な義務や教養に終るものでもない。微笑と沈黙が宗教的表現としては最高の表現であつて、これを措いては眞の宗教的境地は表現し得られない、といふことを明かにする點では、ヘルンの敘述にもまだ物足らぬところがあるのである。東洋の宗教の極地は、言葉や概念による表現の彼方に眞の表現を見出すところにあつて、もし言葉や概念による表現の仕方を知性的といふならば、東洋的な表現は寧ろ、究極に於いては、このやうな表現を擧つところにある。こゝから生育する文化や人倫の一切が、そのやうな色調を帯びるのも亦これが爲である。(未完)

われはたゞ佛にいつかあふひぐさ

こゝろのつきにかけぬひぞなき

法然上人詠歌





俳句に現れた

春の昆虫

町田 徳治

沈丁花が闇の中でも数町先から匂ふやう

な香り高い花を咲かせ連翹も紅梅も今こそ

春が来たとはかりに花を開き櫻の蕾も段々

ふくらんで来たこの頃長い冬の眠から覺め

たり蛹から脱け出した昆虫たちは各々の生

の営みに活動を始めたのである。私は俳句

の中から春の昆虫を詠んだものを選び少し

く書いてみたいと思ふ。

枯芝や若菜たづねて行く胡蝶（百歳）

まことにこの句の註にある如く「右も左

も枯柴ばかり」の野原をどこに若菜がある

かと探ねてゆく蝶の姿は春未ださむき頃我

々も折々見掛ける風景である。蝶は蛹のま

ま冬を越したモンシロテフであらうか。

とべるもの紋白蝶のしろきのみ

これは「天の川」の主宰者吉岡禪寺洞氏

の句。明瞭に「とべるもの紋白蝶のしろき

のみ」と言はれてみると一層に春寒料峭た

る郊外の景が身に近く迫つて来るやうだ。

同じく紋白蝶を詠んだのに

草の露紋白蝶がさめてとぶ（青峰）

といふのががあるがこれは晩春といふより

寧ろ初夏の句であらうと思はれる。

紋白蝶は白地に黒の紋をつけた中形の蝶

で美しいとは言はれないが清楚な姿で春の

魁として我々の眼を惹くものであるがそ

の前身は菜種など十字花科植物の葉を食り

食ふ習性である。紋白蝶と殆んど同時に

生れてやはり春の情趣を感じさせるのに紋

黄蝶があり黒縁の黄色い翅の中央に黒い紋

後翅の中央に橙黄色の圓紋を装つてゐて紋

白蝶に似た形であるが飛び方稍速くすみれ

クロザア、れんげなどの花を訪ねて廻る。

仔細はクロザア、みやこぐさ、からす

のゑんどろなどの荳科植物を食べる。紋白

蝶も紋黄蝶も共にしろてふといふ科に入る

がこの類には他に紋白蝶によく似た色彩の

すぢぐろしろてふ、東京附近には少いが白

色小形で前翅の翅端が雄では橙黄色の可憐

な蝶つまきてふ、つまぐろきてふ、きてふ

等がありいづれも四月頃から出現する。

ひらひらと蝶々黄なり水の上（子規）

生垣にそうてひらひら蝶黄なり（三川）

はつ蝶のちひさくも物にまぎれざる（白雄）

初蝶の一夜寝にけり犬の櫛（一茶）

方丈の大庇より春の蝶（素十）

蝶の句は實に澤山ある。春の蝶としては前に掲げたものの他しじみてふ、あげはてふ、たてはてふ、せせりてふ等があり日本は胡蝶の美に於ても決して歐米に遜色を見ないのである。しじみてふでは春早くからべにしじみ、こつばめなどが現れあげはてふでは四月中旬頃から普通のあげはてふが飛び出し山地にゆけば美しいぎふてふ、或はうすばしろてふ、五月になると妖艶ともいふべき、くろあげは、黒褐色の地に青い帯の縦に走る翅をもつあをすぢあげは等が出て来る。

大揚羽ゆらりと岨の花に酔ふ (蛇笏)

蜺蝶とびつくごとくとまるなり (諸人)

一蝶に雪嶺の瑠璃流れけり (茅舎)

大原や蝶の出て舞ふ臘月 (丈草)

紋白蝶などは春に蛹から脱け出して飛び出すのであるがたてはてふの中には例へばるりたては、きたては、あかたては、ひをどしてふの如き蝶の姿のまま冬を越し春

になると隠れてゐた所から出て来るのもある。たてはてふの類は形は大きくないがその色彩の複雑、翅の形の奇、活潑な飛び方などで人の眼を惹くのである。せせりてふの類は地味な蝶ばかりであるが春先にはみやませせりといふのがみ受けられる。

俳句の季題には菜の花蝶に化すといふのがある。蝶のことで意外に長くなつてしまつたが蝶は春の代表的昆虫であると思ふので稍詳細に述べたわけである。

蜂も早春から活動を始める。例へばみつばちもそうであるし色々名の蜂らぬやうな小さい蜂の種類が多い。くまばちは大形の黒い蜂であるが冬は枯木の枝に穴を穿つてその中で越冬するし、くろつのはきりばちといふ種類は菜の花の花蜜などを集め竹の管に巣をつくつてゐる。その營々として働く様子は見てゐても快いものであり竹を割つてみると花蜜を一種位の長さに固めた上に菓子ゼリピンズのやうな形をした卵

が一つ載つてゐる。そして什切には土の蓋があつて仔細は自分に興へられただけの花蜜を食べて大きくなりその仕切の中で革の様な袋に入つて蛹に化し翌年の春まで眠る。

巢や組まん頻に蜂の簷をよぶ (圭岳)

花の風山蜂たかくわたるかな (蛇笏)

蜂の聲花の一本に溢れけり (枯木)

うなり落つ蜂や大地を怒り遣ふ (虚子)

蜜蜂やしきりに飛んでたのもしき (素十)

似我蜂や己が姿もかへりみず (蘭更)

似我蜂といふものはあをむし、しやくとりむしなどを巢に引入れて己に似よくと

て育てると言はれてゐるがそれは

似我で

あつて

毒針で





麻酔し
たあを
むしに
卵を産
みつけ
穴の中
に入れ
仔蟲は

そのあをむしを食べて成長するのであるが
この食餌となるあをむしは決して殺したの
ではなく針で突けば動く程度で腐敗もしな

い。蜂の種類にはこのやうにあをむしを狩
るもの、あぶやはへを狩るもの、くもをか
るもの、ばつた、こほろぎ、けら、あぶら
むし(こきふり)、等を狩るものもあり水の
中にあるトビゲラといふ昆虫の幼蟲に寄生
するため一寸の間ではあるが水の中に潜り
こむといふ不思議な習性も持つ蜂もある。

虻も春の昆虫である。はなあぶ、ひらた
あぶ、つりあぶなど菜の花の咲くところに

は虻の類が多い。はなあぶの仔蟲は尾長虻
といふ奴で田舎の肥溜や小便壺の如き甚だ
汚いところでうじよ／＼してゐるいやらし
いものであるでそれを知つてゐると親に
なつて翅が生へ花に飛んでゐるのを見ても
あまりよい氣持はしない。仔蟲は春先の新
芽群つてゐるあぶらむし(蘆所)にゐるこぎ
ぶりではない)を食べてゐるやはり蜂蟲状
の蟲である。つりあぶは體に黄色い毛を生
やした吻の長い虻で丁度虻をつり下げたや
うな形に空中に静止してゐる。

大空に唸れる虻を探しけり(たかし)
虻とんで海のひかりにまぎれざる(窓秋)
白日の微塵の中に虻澄めり(青峰)
山道や斯う来い／＼と虻が飛ぶ(一茶)
張かへし窓の障子や虻の聲(吟江)

春も既に深くなつて來た頃松林に入ると
ミーン／＼といふか／＼やん／＼といふやう
な不思議な聲を聴くであらう。これは人に
依つてはマツムシが鳴くのだといふが實は

ハルゼミといふ蜂の種類でヒグラシのやう
な翅の透明な小形の蜂である。

春蜂の聲むしあつき山路ゆく

これは拙作であつて一昨年神奈川縣眞鶴
岬に居つたときの實感。

春蜂や虎杖しやぶる山家の子(栖乙)

雲しろむ針葉樹林春の蜂

後者は飯田蛇笏氏の作であるがこれは普

通のハルゼミではなくエゾハルゼミではな

いかと思ふ。序でにハルゼミといはれてゐ

るのにも前掲の二種の他ヒメハルゼミがあ

りこれは産地が限局してゐるし茨城縣の片

庭で天然記念物に指定されたハルゼミとは

いふものの七月頃鳴くものである。この外

にかひこ、やままゆ、春の蚊、春の蚤、花

見虱、春の蠅、蠅生るなど季節になつてゐ

るし、春の昆虫として紅玉のやうに光るな

なほしてんとうむし、水溫む頃を思はせる

みずすまし、など數々記したいがあまり長

くなるので省略させて置く。



信仰史實



俊乗坊重源について

村田 常 夏

本誌二月號に於て同窓の法友片山了仙君が「袈裟岩と俊來坊重源」と題する信仰傳説を發表された。幸に私は袈裟岩の現地（山口縣佐波郡八坂村）にあつて俊來坊重源の遺跡について貧しい研究を續けてゐるものなので些か所見を述べてみたい。

治承四年平重衡の兵火に罹つて炎上した奈良東大寺の大佛殿再建に際し、大勸進職として、俊來坊重源が佐波郡奥地へ入り込んだのは文治二年四月十日であつた。重源は宋人陳和卿、番匠物部櫻島宗國、高弟蓮花坊以下

十餘人を引具して今の八坂村に入り込んだのである。當時防長二州は源平天下分目の大合戦の直後で、民力の疲弊困憊はその極に達し、夫婦親子は離散し、或は逃亡し、或は肉身を賣り、衣なく耕すに種子すらない慘狀であつた。

かゝる時入國した重源は人民のために職を興へ、種子を頒ち色々力を盡したことは、約八百年を経た今日、尙地方民がその徳を稱へてゐる事實からして明然とするのである。即ち東大寺の用材の運搬には多く地方民を使用したり、これが休養や慰勞にも種々意を

用ひたことも少くなかつた。

用材の運搬には高弟蓮花坊が率領として専らこれにあつた。用材は何分にも長さ八丈乃至十餘丈、口徑五尺餘の巨材であつて、これを一本搬出するには（ろくろ）と稱するものを二張建て、人夫七十人を使用し、又ろくろのない所ではこれを曳くに人夫千人を要したのであつた。この人夫は初めは夫役として田數に應じて課したのであるが、終りには戸別に賦課したのである。ある秋のさ中にこの賦課に應じたため、それ以來麥畑の除草をする必要がなくなつた土地が現存してゐる。斯うして搬出した巨材は佐波川の水流を利用し、筏に組んで運搬したのである。筏を流す水量を得るためには河心に堰を設けて水を湛え流路を作つたもので、その堰の箇所は佐波川全體で百十八ヶ所もあつて、現今なほ當時の堰の残つてゐるところが二三ヶ所もあり、巨材運搬の苦心のあとが窺はれるのである。又重源は拙や人夫の休養のため石風呂と稱するものを各所に作つたもので、現存するも

のは私の知る範圍では、八坂、柚野、出雲の各村にあつて、ある所のものは今なほ使用に

堪へ、またわづかに跡をとめて雑草の茂るに委した所もある。故巖谷小波山人もこの地に遊んで

石風呂のあとそこ
はかと青芒

小波

の句を私の扇にものされてゐる。

本誌二月號所載の片山君の説話の中に重源が木材を運ぶ人夫に興へるため、木片に「鱈」と書いて流したところ、鱈が遡つてきたので自来鱈川と呼び今の佐波川となつたといふことが書かれてゐるが、この傳説に佐波川上流の柚野村と支流の串村の二ヶ所で私もきいて大變面白いと思つ

た。古書巖谷記に『周防の遠ヶ崎は鱈の名所なり』とあり、遠ヶ崎とは今の佐波川河口にあたるので、この傳説と因縁があると思ふ。又大内家壁書に『應仁元年佐波郡鱈川渡定法云々』とあり、鱈川といふ文字も前記傳説と思ひ合はして面白いと思ふ。

重源の用材運搬についての悲しい史實を一つエピソードとしよう。佐波川も上流、約八里、八坂村と柚野村との境に神秘の傳説を秘めて横たはる長者ヶ原と云ふ幽境がある。その裾を流れる佐波川に僧取淵といふ深淵がある。長者ヶ原の斷崖を映して碧潭は渦を巻きつゝ鬼氣人に迫るものがある。

文治十五年八月二日、重源の高弟蓮花坊は今日も率領として筏の運搬にあたつてゐた。蓮花坊の乗つてゐた流送中の筏がどう誤つたものか、岩に衝突し、坊は無慘にも碧潭に吞まれてしまつたのである。

この悲報に接した重源は嘆き悲しんで淵に臨んだ岩上に坐して一晝一夜讀經して坊のあとを弔つたといふ。僧取淵といふのはこの淵



で重瀧の念佛堂といはれる淵の下流にある方が一米位の扁平の岩である。又重瀧は蓮花坊の木像を彫つて字下庄の蓮花寺に安置して靈を慰めたと云ひ傳へられてゐる。現今入坂村に下庄蓮花寺といふ地名が存し、一字の堂と蓮花坊の木像とが残つてゐる。

僧取淵にそのまゝ放棄された用材は河床に埋れて現存してゐる。この埋木は先年黒板勝美博士が踏査の際梅と鑑定された。

今でも旱天の時は、部落民はこの埋木の一ヶ所に藤蔓を結びつけて部落總出この木を曳く眞似をする雨乞ひが行はれてゐる。その時は前記の木像をこの淵に迎へて念佛堂に安置して讃經するのである。

夏さむし僧を洗めし淵の色 小波

要婆岩については片山君が詳細に書かれてゐるので省略する。

入坂村宇三谷の要婆岩に近く九鬼康といふ所がある、重瀧がこの地を通る時、獸類がこの所へ出迎へたと傳へられてゐる。

入坂村大字入坂に奈良定と稱する一族があ

る。これは重瀧が奈良から連れ來たつた一族で最初は同様の大字三谷に住居してゐたもので、その地は現今「奈良原」と云つてゐる。

重瀧は當時この奈良定の一家に宿つてゐたもので、この一家には重瀧を物語るいろいろの物を藏してゐたが現在では四説して何も残つてゐない。當時用材に打ち込んでゐたところの（東大寺）といふ刻印は現今では防府市牟禮の阿彌陀寺に國寶として藏せられ、入坂村の宗廟寺には大般若經が藏せられてゐるが惜しむらくは序と跋が缺けてゐる。

又入坂村船路といふ地名當時の船の水路の意味であり、木津と地名は浪速にもあり、この木津より佐波川に流出した用材は瀬戸内海を経て、浪速の木津に陸揚げしたと古書に見えてゐる。

とまれ片山君の説の如く、要婆岩を岩石崇拜の遺物でしかないといふ冷たい考へ方をされないで、この傳説を生きた史實に結びつけ、要婆岩や鱸川の傳説を生かした高僧の法力と滅私の努力を偲ぶたいものと思つてゐる。

る。以上本記事には私の獨斷と淺學が多分に織込まれてゐることと思ふ。讀者各位の御叱正と御教示を待つものである。

春季俳句會案内

本誌俳壇選者太田耳動子氏の主宰する臨時社の主催で左記の通り春季俳句大會を催しますから、本誌投句の俳人諸氏もせいゝ御出席下さい。（俳壇係）

一、日時 五月十九日午後十二時半

一、場所 日比谷 蠶絲會館

一、議題 すみれ、つばめ

一、入賞 二十等まで

一、講演 俳人、名士、早大教授等

尚投句者は五月十日までに御出句のこと、

會費は出席者五十錢（投句のみの方は三十錢）

です。



想 隨

念 佛 一 つ

中 野 尅 子

念

佛

一遍々々のお念佛に私は、腰の底から、洗ひ去られてゆくように感じます。

一

そして一遍々々、毒抜けがしてゆきます。

つ

一遍々々軽くなり、一遍々々淨化してゆくやうに思ひます。

私の内に在る濁りがお念佛に溶け込んで、私の中から流れ出してゆくやうに思はれます。或は其濁りがお念佛となつて、私から立ち廻り、煙突の煙のよみに出てゆくのを感じます。そして、私の内には滓や沈澱が無くなり、私といふも

のが澄んで来る、透きとほつて来るといふ感じが、ハッキリいたします。

私は嘗て伊勢の念佛者、村田和尚のところへお訪ねしたことがあります。その時、初めてお逢ひして、此の方は「透きとほつたやうな方」だなアと感じました。水晶のように見え透いて、一點の曇りもない。そして鋭い、鋭いといふ

ても亦、一面非常にやさしく、一ツの隠し處もなく、全部開けツ放しで、笑ふ時にはカラ／＼と笑つてゐられる。實に廣やかな、明る

い、豪快な人だなアと感心しました。そしてお念佛といふ事は、アいふ風になることだなと思ひました。

而しお念佛は、そう初めから、カラ／＼と笑つて居れるやうな愉快なものではありません。それは一體なぜかといふと、お念佛は吸

取紙のやうなものだから、遠慮なく、私自身の汚點を吸取つて行つて下さる。だから、念佛すればする程、ますます自分が苦しい、自分の汚いところを見せつけられて自分が壓へつけられるやうに感

會員通信

日・華
共修念佛

知恩院天津別院

瀧澤 遵道

普通の場合であつたら日本と支那との人と人との交際は何の濁りもない水臭いおつき合ひになるが私共には至公、至聖、の媒介者、國境を超越して居る阿彌陀様が居られます。

阿彌陀様を媒介者に仰いで、あなたの御光りに融け込んで行くと、そこには「日」も無ければ「華」もない。味方もあつたものではない、只々あなたの思召しまかせで安居樂業、成就衆生の大業が完遂されるのである。要は最高の外交は先づ第一に日支共々、佛教の



ずる。そして有難いことは少しも
無く、切ないだけです。それは其
の筈でせう。念佛の體が清淨であ
ればこそ、私達の汚れを吸取つて
は、眞實な場だらけのお念佛とし
て見せて下さるのです。而し、そ
れだから、お念佛する度に、私達
の心垢が除こつて聖化してゆく
でせう。恰度、着物を
洗滌して、何遍盥の水
で滌いても、水が穢く
なつて腹が立つような
ものです。けれ共、そ
れだけ洗濯物はキレイ
になつてゐる。
心の清き時に神を見
るのです。神が映るの
です。心が穢く、心が
腐つてゐる時は朽ちた
丸太のように水底に沈
んでゐる。泥の中へも
ぐつてゐる。それが地
獄です。而し、美しい
花を咲くようになると
水草のように水面へ浮

登山家御難 山崎善一
「オウあんたも勤勞奉仕に行くのかネ惡心々々……」

んで来る。カラダが軽くなつたか
らです。上へ伸びるようになった
からです。
大きい飛行船も、舵一つで自由
自在に動く、だから、舵一つの陸
へ、飛行船全體が隠れてゐるよう
なものです。いや、此の舵一つの
中から、世界をクル／＼と廻り、
世界をクル／＼廻す力が出て来る
譯です。信仰といふものは「唯だ
一點」です。「正しき唯一點」で
す。而も、此の正しき唯一點より
千變萬化して、如何なる變動にも
應じ、此を乗切つて、此を利用
し、此を元として新事態を創造
して行ける働きが出る。
大きな樂園でも心臓一本で運
る。數百尺の鐵塔でも、一點の「中
心」で支へることが出来る。「動か
ぬ中心」を握んだら、どんな激し
い活動でもすることが出来る。結

ルツボに入れ如來光の慈慧に燈
かしてその後、各々新秩序の製作
に向ふこそ一番の近途である。
私達が天津で働いてゐる日華共
修回願念佛會では日華兩國の居士
が二百餘名も集ります。そして支
那僧は支那音でこちらは純淨土字
式で誦んで居るのですが夫れが五
分、十分經つと夫れこそ驟然一如
融け込んで行つて「ナモオミトー
フ」「南無阿彌陀佛」音の異同も、
時局の推移も皆取除けられて、そ
こには入我に入、斷然國境無く信
仰より得たる人類愛が鬱然として
湧へ出で最後の三唱一禮の如き彼
我共に何にか分らん涙が止めど無
く流れるのでありました。此間の
消息は唯唯佛の人へのみ味はれる
妙味でありませう。
夫れから夕飯の御供養がありま
した、支那饅頭と精進のお汁で

局、吐が壓つて居るからです。

「吐に——信が籠り、吐に——」
如來さまが遣入つてゐて下さるか
らです。

法然上人は、いつも「たゞ一向
に念佛すべし」「申す外には別の
仔細候はず」と仰せになつてゐら
れた。「念佛」の外、何も持つてゐ
られななんだ、「念佛」の外、何も
して居られななんだ、本當に念佛一
ツが「吾がもの——」になり、念
佛一ツに我れが成つてゐたら、戦
ふべき時には

「戦へ！」
といふて、念佛が戦はして下さ
る。其時には戦より外に途が無
い、戦ふのが最善の處置であるか
ら、戦はしめ給ふのであります。
又、和すべき時には、
「協和せよ——」
といふて、時には戦信の股くぐり

をも辭せぬ程に、協調平和を強ひ
給ふ。賣るも買ふも、就くも去る
も、生くるも死ぬも、皆、「念佛」
が教へ給ふ。いや、念佛が先立つ
て「自ら」その生くる人、死ぬ人
になり、戦ふ人、逃ぐる人になり
勝つても負けても、悔ひのない、
常の「勝利者」として自ら行動し
給ふ。だから「念佛の外に仔細」
が有る譯がなく、たゞお念佛の一
行のみあつて無二亦無三です。
お念佛の一ツで何も何も出來、
念佛以外の「手」で何をやり、彼
をやる必要はないのです。いや、
念佛以外の手でやつたら、一切失
敗で、たとへ、善に見へ、成功に
見えても、悉く非善であり、不
成功であります。

だから「念佛一ツ」「專修一
行」といふこと以外に信仰はない
のです。

だから單信直行で、信仰なシと
いふことは簡單な事です。易行易
修にして、スラ／＼出來る時に
は、實に平易なことです、六つか
しい事、八重こしい事で頭を捻ら
んならぬ事ではありません。
法然上人は、濁流蕩々の大河で

「河の水の干くのを待つてゐた
ら、渡る時はナイ。直ちに渡
れ、足の下だけ水が退く」
と云つてゐられます。念佛は無礙
の一道です。眞の念佛一ツになつ
て突き込んだ時、魔界外道も障礙
することなく、天神地祇も敬服し
給ふのです。

二ノ矢、三ノ矢はいらぬ、念佛
一本で突き進んだ時、討死しても
未練はナイ。ソコが「お淨土」であ
つたからです。

ありました。日華信者を一人づ
つ仲に狹んで頂くお齋はモ一百年
の知己も及ばぬ親しさで私は遂に
が一杯になりました、御飯が濟ん
でから私は私の唯一の武器「淨土」
を一部づゝ差上まして約四十分斗
り淨土を稿本として法話を試みま
した。

毎月二、三回催されるこの念佛
會が縁となつて信者同士の私的交
際が密になりました。各自營業のお
得意にもなつたりなられたりして
居ります。

特に申上ねばならんのは此動機
からして、前總理大臣新靈閣閣下
が敢然と立擧がり日華佛教聯盟に
進んで参加し、豫算壹百五十萬圓
の計畫を提案されて既に土地の寄
附まで申込まれて居ります、ここ
らでも全天津各字を糾合して緊密
な提携が具體化されて居ります。



灯せる自轉車置き花の下

山口縣、長岡、白根

評 ナショナルランプのやうなものであらうか。それを、灯した自轉車が園の深山咲いてゐる、その下に置かれてある。花の雲を照してゐるかも知れない。此の主持ち顔の自轉車。じきに歸つてくるやうに灯をつけたまゝになつてはゐるがと作者は其處に興味をもつて出来た句であらう。じきに歸つて来るかしら。

作者や私の考へが當つてゐるとしたら此の自轉車の主が始めては自重してゐたものが迷ひ引つかゝつて自轉車にも乗れないやうに酔つて了つたのではなからうか。「灯せる」が良い。

大阪市 森 正義

あたり欄多くして水ぬるむ

評 大阪は欄の多いところであるが、作者の立たれた所はとりわけ多かつたか、多いと感じたところに選ひない。水路狭狭にして一目で多くの欄が見渡されるところかも知れない。此の多くの欄と水の混むことは何んの關係もないことではあるが、多くの欄にうながされたかのやうに水が混ん

できたといふ此の感じ方が良い。

北海道 花田 國住

奥蝦夷の雪もつゝめり春霞

評 「奥蝦夷」とは單に北海道といふのではなく北海道も更に奥の方を指すのであらう。

四月の雪がかゝつても容易に雪は消えそうにもないが其の他の氣象は雪とかゝはらず進行してゐる、山の雪も麓の残雪も一切が露に抱擁されてゐると言ふのである。斯うした露等によつて、北海道の人にはせつない氣持を慰められ乍ら春を待つてゐることであらうか。中七字が良い。

石川縣 西村 けん治郎

ほのぼのとホテルに春の軋り聞く

小樽 平井 善慈

肥後も春の薫り中にあり

中支 大槻時一郎

春眠は浅く爆竹とどろける

東京 森田 法見

うらくと富士のしば山霞けり

長崎市 池田 眞三

咲ほこる菜種は空は蝶の春

東京 三野 輪幸節
もちぐさを東京の人つみにけり

大分縣 石堂 柑山生

桃樹のあとしざりそむ春の雨

石川縣 中谷 行々子

古寺の睡苔ばかりの花つけて

青森市 高松 正登坊

鶯に明けの廣さの陽が包ふ

和歌山縣 奥村 映乃

磯浪のしぶきに空の春淺し

大阪府 日比野 谷記三弘

何もなき入江の水の温みろし

山梨縣 雅 原津谷

送り来る酒のきげんや春の月

鳥山町 大 輪

桐の本井の森しき宵ともる

神戸市 李 城

四山公園

今日も皆花見がてらの朝體操

京都 春 風

谷川の水飲む牛や春深し

米田市 間 瀬 鶴

石投げてえがく水輪も温みけり

徳島縣 海部 山人

鶯の來て啼き窓の明けろたり

奈良 和田 章池路

寒餅の青く微たり春の立つ

岐阜市 瀧 眞松 華

揚雲雀きゝて耕よろこべる

三重縣 清瀬 やす
藪と住みて今日鶯の初音かな

高松市 堀本 はち

麗かのけふもつゞきて彼岸寺

京都市 氷田 七郎

春の川おぼろ／＼に暮れにけり

靜岡縣 小泉 民平

鶯の聲をきゝたる一と休み

山梨縣 程 原一幸

月落ちてより雁の聲ばかり

大阪 田中 秋芳

芽の青む春を知らずやみの蟲の

東京市 椿 椿

初雪も梅花も散らし猫の戀

靜岡縣 小泉 民平

裏山に鶯なきて春は來ぬ

東京 淺井 まさ子

歸還して袂重たき春着かな

東京市 松岡 成泰

遊園機の靜かに下りて櫻花散る

南支 古川 喜作

春光のおもひみちたる草の丘

栃木縣 山田 隆人

ぬり下駄に素足も輕し夏衣

投稿規定

官製はがきに一回二句以内
とし「淨土」編輯部併置係
あてに送ること。



阿彌陀佛の功德の内容

擔 當
中 村 辨 康

三問二

毎月我等の爲
に難題「淨土」

信 — 御惠送下被信仰心を培養下されて深く御禮を申し上げます。就ては御手数ながら左記お尋ねいたします。

仰 — 選擇集第三章私釋第四項に「然れば彌陀一佛にあらゆる四智三身十力四無畏等の一切の内證の功德、相好光明說法利生等の一切の外用の功德、皆悉く阿彌陀佛の名號の中に攝在す。故に名號の功德最も優れたりとす」と

答 — ありますが内證外用の徳に就いて我々病人に寝ながらの念佛において多少にても伺ひ得らるゝやうにお解き下されば幸甚と存じます

(金澤陸軍病院・八坂周三)

二答

本廠では到底委しく申し上げることが出来ませんから、概略だけでおゆるしを願ひます。

先づ内證とは自身の中に證得したものであり、外用とは外に出すはたらきのことであります。之れは誰にもあることですが、唯だ内容や力が違ふだけです。

四智とは四種の無漏智（煩惱を無くしたのちの智）で、一、大圓鏡智（丁度大圓鏡が色々の形像をうつし出すやうに如來の鏡智の中には一切の境界の相を現はして殘すところがないからである。之は第八識の轉じたもの）二、平等性智（一切は平等であるから衆生を憐む大慈悲と相應し衆生の所願に隨つてお姿や淨土を示現するところの智で第七識の轉）三、妙觀察智（森羅萬象の眞相を正しく觀察して疑ひなからしめ衆生に利益を興ふる智で第六識の轉）四、成所作智（完全な行作をなして衆生を利益する智で、本願力の依つて起るところ、前五識の轉）の四を云ひます。如來の一切智は此の四智の作用であります。次に三

身とは佛身の三方面を分けて云つたもので、一、報身（佛身の根本で、修因に酬ひられた身であるからである）二、法身（佛身は法性の顯現であるからその法性の理の方面を指してゐる）三、應身（衆生の機に應同して教化する方面の佛身を云ふ）で此の三身は報身の理と働きを分けたものですから三身即一とも云ひます。また十力とは佛の神力を十種に分けたもので、一、處非處智力（如實に一切の理と非理とを知る力）二、美惡智（三世的達の力）三、靜慮能脫等持等至智力（一切の禪定と解脫との次第淺深を知る力）四、根上下智力（衆生の信とか努力とか智慧とかの諸根の勝劣上下等の差別を知る力）五、種種勝解智力（人々の種々の希望を知る力）六、種種界智力（人々の性質や行爲を知る力）七、遍趣行智力（道行の因果を知る力）八、宿住隨念智力（宿命智で過去一切の事を知る力）



説相仰信

九、死生智（天眼智）の事で、生死や來世の事を知る力）十、漏盡智（一切の煩惱を斷盡した他人の漏盡を知る力）この十力はその一一に次に云ふ四無畏が附いて居るから、本當には四十力四無所畏となるわけであらう。つまり一切知と一切能とを云ひ現はしたものです。四無畏は一、諸法現等覺無畏（一切の法を悉く知つて居るから畏れるところが無い）二、一切漏盡智無畏（一切の煩惱がないから外から來る災害苦難を畏れない）三、障法不慮法定授記無畏（惡法や迷信などの正しくないものであることを説くとき、之に對して批難を加へられてもそれをよく説明して畏れることがない）四、爲證一切具足出道如性無畏（解脱の法を説いてその道を行へば必ず苦から脱することゝ示し、之に對する外難があつても決して畏れることがない）で主として説法の力を指して居ります。大體佛には十八不共法と云つて十力四無畏三

念住大悲の十八種の特別な（不共）ものがある。と云はれて居ますが、その三念住と云ふのは説法をする時、自分を尊敬する人の場合も尊敬しない人の場合も、また尊敬する人と、しない人と交つて居る場合も、皆な均しく平等の心を以て法を説く廣い無差別の氣持を言つたものですが、之等は結局大慈悲を中心として居るからです。

次に外用の徳の内、一般に相好を三十二相八十隨形好と云つて居ますが、阿彌陀佛の相好は「無量相」であつて觀經には「有八萬四千相一一相各有八萬四千隨形好一一好復有八萬四千光明」と云つて居りますし、隨つて光明も無量無邊で大經には十二光等を擧げて居ります。

科學と指方立相

二問

惠心僧都や法然上人様の御遺言を讀みますと、極樂を非常に觀念的にお説きになつて居る様に思ひますが、淨土門の御高僧などは極樂の存在を絕對的な

ます。また説法は前の十力四無畏三念住等皆な説法の爲の力で、見やうに依つては森羅萬象皆な悉く如來の説法ならざるはないと昔から云はれて居るのであります。しかもそれは悉く利生の爲で私達衆生を利益せんが爲に四智も三身も十八不共法も相好も光明も説法もある譯で、如來の一切の内證外用の功德は擧げて利生の一事におさまつてゐるのであります。そしてそれが擧つて南無阿彌陀佛の六字の名號となり、最も簡單な口業の稱名を以て私達の心を淨土へ攝め取つて下さるのですから、私達こそは本當に此上もない幸せなものと思はねばなりません。

ものと思つて、民衆を教化なさつたのでせうか。ところが天文學者の眼から考へますれば、指方立相などは愚人を慰める假定としか思へません。果して私の考が間違つ



談相仰信

てゐるのでせうか。それとも淨土門の御高僧方の信仰でよいのでせうか。僧越々ら何卒御教示下さい。

(和歌山・加太町・高木生)

二答

昔の人に決して神佛の存在や、神佛の世界である高天が原とか極樂淨土とかに就ては、何の批判も下さず其の儘素直に信じて疑ひませんでした。従つて淨土門の信仰についても、煩悩具足の凡夫が何うして煩悩なき佛の世界へ行き得るかの疑問が邪魔をして居るだけだったので。あなたは神代記に説かれる「高天が原」を何う御考へになつて居られますか。國民である限り、國民性の然らしむるところか、それに對して批判なしに信じたい氣持で一杯でせう。イヤ信じたいのではなく、國民である限り皆な信じ居るのです。然るに佛教の極樂淨土に對しては、何の顧慮もなく天文學まで引つ張り出して深刻な疑ひを掛けようとして居られるの

は、却て無批判な態度に墮して居ると云はれても仕方がないでせう。

また觀念的と申しますが、形而下の問題ならいざ知らず、形而上の問題を取扱ふのに觀念を離れて説明が出来得るか何うか。私は出来なないと思ひます。と云つても信仰は決して觀念に終るものではありません。信仰が情操となり意志となり生活となつて居ることは、觀念から始まつても觀念だけで終つて居ないことを證明するものです。あなたのお用ひになりました天文學にだつて觀念的な問題がまだくゞ残されて居りますが如何でせう。例へば星雲の如きまだハッキリした定説がないではありませんか。まして宗教上の問題を天文學や地理學などと一緒にして考へようとしたとて何の役にも立ちません。あなたの精神界のことを天文地理と關係付けて考へたとて解答は出て来ないと同じです。

私達は何事をも存在的に考へようとして居るから、執着や苦惱や争闘やの輪廻生活から抜け出ることが出来ないのです。私達の身

の廻りにあるものは、一つとして實際の「存在」ではありません。變化が緩慢だから「存在」して居る如く「見えるけれども、實は一切合切「變動」であり「變化」しつゝあるもの」であつて、固定して居るものは何一つありません。科學だつてそれ位のことは教へて居るではありませんか。變動の緩慢なのは音ですが、聲が高度になれば光となり、更に高度になれば色となる。しかもその質の相違は電子量の配合の相違であり、多數の電子は超速度の變動をなしつゝ質と色とを現象しつゝあるのだと教へて居る科學は、明かに物質の「存在」なるものは「變動」の千差萬別の姿であつて、私達は不完全な網膜の誤れる感覺に依つて、固定存在かの如く思ひ込められて居るだけであることを證明して居るのです。科學はまだ發展途上にあるのですから、之れも或はまだ暫定的な理論かも知りませんが、少くとも佛教の固定否定論にやゝ近づきつゝあるもので、佛教の無常説、無我説などは科學の發達に依つて漸々其の眞價を發揮するわ



けです。

それで「指方立相」の問題ですが、私達人間は何か具體的なものを發表する場合「相」を離れては何う仕様もありません。既に「相」を云ふならば必ず「場所」が附随します。場所を離れて物の姿は考へられないからです。

場所は「指方」であり姿は「立相」であります。此の故に具體的な説明には必ず「指方立相」が無ければなりません。指方立相なしに或る一つの具體的な事物を指示することが出来るでせうか。出来る筈がありません。然らば私達の日常茶飯時の話しに使用する「指方立相」は單に愚人に對する假定でせうか。無論「言葉」は符號ですし一つの假定です。だからこそ民族を異にすれば言葉が異なる筈です。言葉は畢竟民族間の約束です。して見れば宗教上の約束である宗教語が「愚人を慰める假定」と斷定し得る理由にはならない筈です。私達は和民族の使用する名詞

や辭句や形容詞などが假定であつても「愚人を慰める爲のもの」ではありませんやうに、宗教語も決してそんなものではありません。

十方の淨土の中に「西方」を探り、十萬億土の彼方に阿彌陀佛の本願成就の淨土の相を説くことが、單に「言葉」を借りて居り約束を借りて居ると云ふだけの理由で、何うしてさう無難作に片付けられ得るでせうか。淨土教の「指方立相」は宗教上の約束であつて、天文や地理などの約束ではありません。法然上人は「十方に淨土多けれど西方を離ふは十惡五逆の生まるゝ故なり」と、その理由をハッキリ述べて居られます。つまり十方に佛の世界たる淨土は多くあるけれども、何れもむづかしい資格上の問題が限定されて居て、私達凡夫は無資格であり、たとへ望んでも不可能であるが、獨り阿彌陀佛の淨土のみは五逆十惡の罪深い最低の者をさへ救ひ取る徹底した慈悲の世界であるから、私は西方の阿彌陀佛の淨土を願ひ求むのだと云ふのです。即ち「西方」とは彌陀の淨土の代名詞なのです。五

逆十惡の最低の者をさへ抱き取つて呉れる世界の代名詞なのです。そしてそれは少くとも法然上人御自身がその信仰に立たれて居るのであつて「愚人を慰める」ために言はれた言葉ではありません。また「過西方十萬億佛土」と云ふのも、十萬億と云ふやうな數多い諸佛の淨土に「超過」した世界を意味するものであつて、地理的天文的に解釋すべきものではありません。若し西方十萬億の向ふからならば「過東方十萬億佛土」と云はなくてはなりません。さうは云ひません。東西南北上下左右何れの方面からでも、また信仰に入らない「求道者」に取つては徹頭徹尾「過西方十萬億佛土」なのです。しかも信仰に入つてしまへば「此此不遠」であつて「こゝに居ながら極樂の聖衆の數に入るぞ嬉しき」であり「娑婆の穢身はかはらねど心は淨土にすみ遊ぶ」ものなのです。尙ほ「西方」としたのに就いては、さうしなければならなかつただけの別な理由があるのですが、前に此の欄で云つたことがありますから今は略させて置きます。



佛典
童話
金色の獅子

内山 憲 尙
齊 藤 清 畫

「金色の獅子だと云ふことだよ。」

「噂には聞いてゐるが、まだ誰も見た者はないだらう。」

「それが、此頃、聖山の上の聖者たちの庵のあたりへ出て来て、聖者の讀むお經をじつと聞いてゐるとのことだよ。」

一人の農夫と、今一人は鑑師らしい男、しきりに金色の獅子のことを話し合つて居ります。マンゴの樹は、その大きな影を、午後

の太陽に照らされてくつきりと地になげてゐます。
「では王様のお求めになつてゐる、金色の獅子の皮じゃないか。」

信仰實話

念佛で勵む

信仰の店

片山近一氏の話

本を讀みたい、別時念佛を修したいところの中で思ひながらも、われ／＼は仕事に追はれて時間がないとか、餘裕がないとか云ひたがるものである。勿論これは努力の足らぬものの言ひで、精進さえすれば難しいことでないと考えるが、さて毎日毎日起るから寝るまで仕事に酷使されてゐるわれ／＼にとつては、思ふ心爲すにまかせずで焦ら／＼するばかりである。

しかし若しわれ／＼のその日／＼の生活や仕事に念佛申すことであつたら、何んな仕事に従事してゐてもお念佛の中に暮らすことゝな

「そりだよ、金色の獅子の毛皮——それを持つて行けば御褒美は望み次第だよ。」

「ところが、大きい獅子だ、そりたやすくつかまへられるものか。」

「聖者には手向ひしないのなら、聖者が捕へて王様に差し出せばいいのに。」

「ところが、聖者は生物を殺したり苦しめたりはしないのだよ、だから獅子も安心をして近寄つて来るのだらう。」

「なる程ね。とに角金の獅子を捕へて御褒美にありつきたいものだね。」

「おや、時間の経つのを忘れてゐた、今日はまだ畑に仕事が残つてゐる、どれ出かけやうか、兎でも捕つたら御馳走しておくれよ、さようなら。」

波羅奈の都に近く、聖山と云ふ美しい山が聳へてゐました。山は緑蔭たるやうな樹に包まれ、谷川のせーらぎは天人の音楽の様に響き、天絨氈のやうな柔らかな若草の上には獅子鹿が三々五々逍遙つてゐました。ほんた

うに仙境と申しませうか、福樂と申しませうか、靜かな、長閑な世界でした。

聖山の頂に近いところに小さな庵が立てられてあつて、そこからは四五人の聖者が、朝夕お經を讀む聲が、靜かな山の空氣を破つて谷に木魂いたします。

聖山がすつかり夕霞に包まれかけますと、いつもの通り、聖者達のお經の聲が、黒い林をぬけて谷へ消え、晝でさへ靜かな深い山は全く眠らんとするのであります。この夕方のお經の聲が響き渡りますと、どこからともなく一疋の大きな獅子が姿を現はして、お經の聲に近づいて参ります、その獅子の毛は、鮮やかな金色で、消え残りの夕日を受けた時などは光り輝いて、全く例へることの出来ない程の美しさです。そして、この獅子が出て來ると、聖山に棲んでゐるすべての獸は、どんな大きい獸でも、どんな強い虎でも、すべて鳴を沈めて、この大王の前に低頭するのでした。金色の獅子は聖者達を心から尊敬し、お經を聞くことを何よりのよろこびとしてゐまし

り、こんな苦勞は要らぬわけである。この仕事をしてくることが即ちお念佛であり、お念佛を申さずには仕事の出來ぬ人に片山近一さんがある。

片山さんは工場を二つ經營し、自分の店も持つてゐて、しかも日本木螺旋工業組合理事長として工業界に活躍しながら、毎日の生活を一舉手一投足までお念佛で暮し、お念佛によつて活き、他からみれば實に忙しい仕事に従事しながら自分では「毎日の生活はお念佛を申すだけです」と云つてゐる。



片山氏
と御家族

た。お經が始まると、庵の近くにじつとうづくまつて、猫の子の様に靜かに聞き入つてゐるのでした。

*

それは、春も早や半を過ぎた日の午後のことです。登山をする人をほとんど見ることはない聖山へ、一人の聖者が、慌しく登つて行きます。

頭も鬚も縮に剃り落し、身には法衣を纏ひ袈裟をつけ、左の手には鉢をさゝげてゐる獅子は、どこから見ても立派な聖者としか見えませんが、石に腰を打ちかけて憩む時に、法衣の下からちらりと見えたのは、職師の持つ強弓と毒矢とでありました。

「どこから見ても立派な聖者様だわい。まさか獅子もこの聖者様が職師とは氣がつくまい……御褒美は望み次第か。ありがたいことだ。どれ時間はよからう、さあ出かけるとしようか。」

聖者は一人言を云ひながら立ち上りました。そして深い森の中へその姿を消して仕舞

ひました。

*

聖山には夕靄が訪れて來ました。森は次第に黒さを増して來ます。たゞ谷川だけが、白く銀色に光つてゐました。

やがて、聖者たちの夕のおつとめの讀經の聲が森の靜けさの中へとけ込みはじめました。そのとき、どこから出て來たか、一疋の金色の獅子が、庵へ近づいて參りました。そして柔かい草の上に蹴まつて、耳をかたむけてお經に聞き入つてゐました。

その時です。森の木の影響から、一人の聖者が勿體らしく鉢をささげて、靜かに獅子の方へ近づいて參りました。靜かさを装つてはゐますが、その足は落ちつきがなく、手は小さく震へてゐました。

金色の獅子は足音の方をふり返つて見ました。そこには聖者が靜かに目を閉ぢて立つてゐました——もしその姿が聖者でなく職師の姿であつたら、勿論、あの鋭い爪で一割きにして仕舞つたことでせう。

だから片山さんのお店では主人を初め店の人達が朝出勤して店に出ると先づ事務室の中央に莊嚴されてある阿彌陀さまにお詣りをし、今日一日の仕事をお念佛で從事出来るやうに祈願し、お念佛を申してから仕事にかゝるやうにしてゐる。そして一同は常に明るい氣持で生き／＼として仕事をしてゐる。

當の片山さんは毎日の仕事をする上の心持ちや今までの佛縁について次のやうに語つてくれた。(以下片山さんのお話)

「仕事なり事業なりをすることがそのまゝお念佛の道であると思つてゐます。お念佛を申しながら仕事をしてゐるので、お念佛を申さなくては仕事が出来ませんし、仕事をする内に念佛がついて出て來ます。私にとつてはお念佛と仕事とが全く同じ道であり、同じものとなつてゐます。何かの具合で念佛の申せない時には、ポケットに手を入れれば數珠に手が觸つて忽然としてお念佛が申されます。だから電車の中でも、又困つた時でもお念佛によつて忽ち道が明るく開けてゆきます。」

獅子は軽くお辭儀をして新しい聖者を迎へるやうに見えました。聖者は口の内でお經らしいものを唱へながら獅子に近づいて來ました。獅子はちつと蹲まつて頭をたれて、尊いお經に聞き入つてゐました。



へたかと思ふ間に弓を藏形の様子に引きしぼつて頭を下げてゐる獅子の心臓を目懸けてはつしとばかり放ちました。

金色の獅子は急所を射られて「ウー」と一聲叫んだまゝ、そこへバツタリ倒れて仕舞ひました。

聖山は静かです。

そんな惨劇のあつたことも知らずに、谷川の水はさらさらと鈴をころがす様な音を立て、流れてゐます。霞の静けさを破つて響いてゐました。

＊

波羅奈の城の王様のお部屋です。

何事にも表と裏のあるやうに明暗や苦樂はつきもので、暗い方面や苦しいことを嫌がつたり恐れたりして神佛に祈願するやうなことは決してしません。お念佛を唱える内に仕事をしてゆけば、必ず明暗や苦樂を越えてゆくことが出来ます。

信仰についての理窟や學問は何も存じませんが、唯宗祖上人の一枚起請文の中に、唯だ一向に念佛すべしとあるので申すのみで、その外に説教を聞き説法を読むことがあつても強いて學問せねばならぬといふ氣持ではなく宗祖上人の御言葉を信じ切つてそれで生活してゐます。未來の生活は現在の生活のまゝ續いてゆくのですから極樂往生するためには、先づ現在の世界に努めて極樂を發見してゆけばよいと思つてゐます。

こんな氣持で毎日を送つてゐると、總てのものに對して感謝しつゝ暮すやうになりました。例へば家具とか、道具とか、機械とかのものについてみれば、それ等が現在持つてゐる役目、つまり色々な役に立つてゐてくれるこ

「その獵師はまだか！」王様は、優しく大臣らしい右の家来にお聞きになりました。

「只今、次の部屋に控へさせてございます。」

「苦しうない。これへ通せ。」

「かしこまりました。」

やがて次の部屋からは、立派な箱を持った獵師風の男が案内されて入つて來ました。

「その方か、金色の獅子の皮を持参いたしたのほ。」

「左様でございます。只今、その皮を御目にかけますでございます。」

獵師は、箱の中から金色の獅子の皮を取り出しました。その色の立派なこと、窓から射し込んで來る日光を受けて、眩しい位に光つてゐます。王様は思はず立ち上つて、

「これは立派なものぢや、色の美しいこと、

純金の細い針金を植えつけたやうぢや、これへ持て！」

家来が差し出したのを自ら手にとつて御覽になつてゐましたが、さも満足さうに、

「世界に二つとないこの金色の獅子の皮、わ

しは世界一の物持ちになつたぞ。」

家来たちも、てんでにその美しいことを賞めました。やがて王様は獵師の方をお向きになつて、

「その方は何と云ふ強い者ぢや、この獅子は

世にも珍らしく強いものだ聞いたが、よく一矢で射止めたな。」

獵師は、さも得意らしく、

「御言葉恐れ入ります。この獅子を捕へます

ためにはなかなか智慧を働かせまして御座います。」

「左様なこともあつたらう。してどうして射止めたか、その様子を聞かせよ。」

「この獅子はたゞの人間力ではとても捕へる

ことはおろか近よることも出来ません。そこで、一計を考へました。それは外でもござい

ません。この獅子が近頃毎夕、聖山の聖者の讀經の聲をしたひ寄り、經文を聞くことをよ

ろこびとしてゐて、その上聖者には安心をして害を加へないと云ふことを聞きましたので

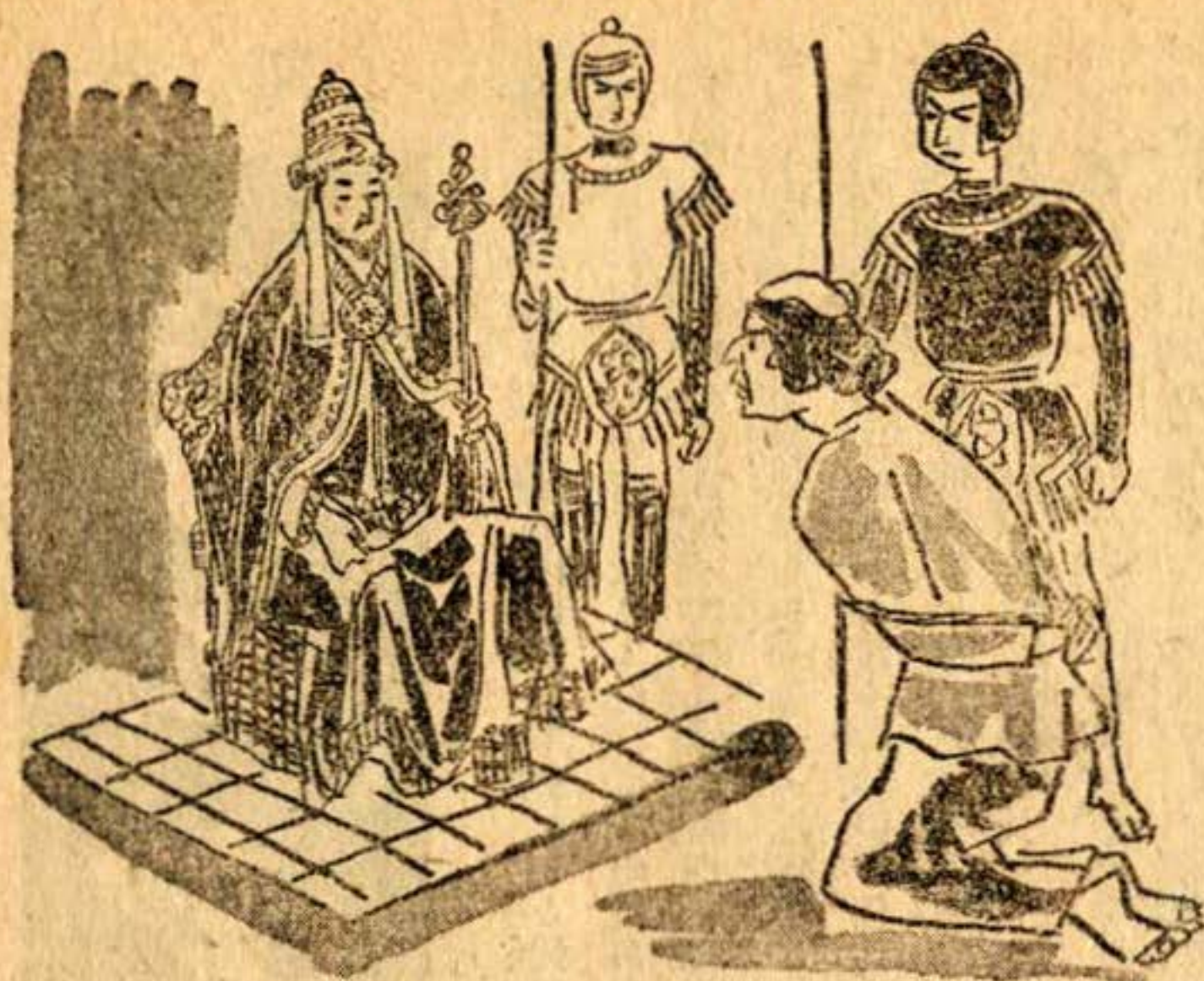
早速聖者の姿になりすまして獅子に近づき、

とについて感謝し合掌いたします。又、これ等を造つてくれた總ての縁について合掌いたします。

店に働いてくれてゐる人達や、社會の一般の人々のお蔭で、毎日こうして暮せるのですから、總ての人に對しても合掌いたします。おがむ御本尊は阿彌陀さまですが、阿彌陀さまのお光りに向つて合掌してゐると、すべての物や人が矢張り阿彌陀さまのお光りを蒙つてゐるので、この物や人に對しても有難いと合掌してゐます。

このやうにして仕事をすることもお念佛を申すことも全く同じことですが、實際には矢張り本尊をおまつりして禮拜し、御本尊を通じて仕事にいそしむやうにしてゐます。

店の者達にも毎朝出勤したら御本尊阿彌陀さまをおがんでから仕事にかゝるやうに云つてゐます。中にはおがまない者もあるやうですが、この人達に禮拜を決して強いません。ただ自分で模範を示すつもりで毎朝禮拜し、後は店員達の縁の熟するのを待つてゐるだけ



安心をしてゐるところをたつた一矢で射止め
ましてございます。一、

鑑師はさも得意らしく話しました。王様は
黙つて聞いておいでになりましたが、鑑師の

話が終わるか終らないに

「なに、聖人と見せかけて獅子
に近づき、射止めたと申すか、た
わけ者奴！」

動物とは言ひながら聖者をした
ひお経を聞いてよろこぶと云ふ信
仰の篤いものを、聖者に化けて欺
し殺すとは何と云ふ大悪人じゃ、
その悪人を牽いて獄屋へ入れて仕
舞へー！」

鑑師は獄屋へ入れられて仕舞ひ

ました。

王様は金色の獅子のために立派
なお堂を建て、丁寧にお弔らひに
なりました。

(終り)

で、因縁の足らぬものは仕方ありませんが
その内自然と阿彌陀さまの方に向いてくると
自信を持つてゐます。

父は三歳の時に急死しましたが、父が幾つ
かの事業に失敗したために、資産を蕩盡し、
父の死後直ちに母と二人で路頭に迷ふことゝ
なりましたが、母の細腕でやつと小學校だけ
を卒え、その後東京に出て働きましたが、か
の震災で又無一文になりました。この震災の
時に住所を芝増上寺前に移轉し、毎朝芝公園
の森で晨朝會の鐘を聞き、初めて増上寺にお
詣りをし、説教を聞くことになりました。

今から考へると、父が急死したことも震災
で無一文になったことも私にとつては大きな
鞭撻になり、佛縁に結ばれる因縁となつたも
ので、この道境こそ有難いことであると感じ
てゐます。今度息子が出征する際にも、私の
持ちなれてゐる二輪の數珠を渡してやりまし
た。だから戦地でもお念佛を申しながら元氣
で軍務に服してゐることとせう。」

(片山氏は佐賀の人、當五十三歳)

大野法道・中村辨康・前田聽瑞三師 共 著

法然上人鑽仰會發行

新 刊

淨土宗讀本

南無阿彌陀佛と申すほかには別の子細なしと元祖法然上人は仰せられてゐます。まことに淨土宗の眞髓はこゝに存するのであります。

しかし、現代に生きる人々は日々の生活の奥底においては常にこの境地を求めながら、身につけた繁瑣な習俗や傳統や近代的な科學教育のおかげで、この素朴で眞實な淨土教義の三昧境から遠く押しのけられておることが多いのです。

宗祖法然上人がひと度開闢せられたこの境地は人生と呼ぶ砂漠の中のオアシスであります。しかも人々をこの境地に再び引き寄せるためには鱗のやうに身心にこびり付いてゐる習俗や教養を順序よく一つ一つ剥ぎとつて行かねばなりません。これが淨土教の、廣く云へば佛教徒の現代での任務なのであります。

淨土宗讀本はこの任務を最も手際よくやつてのけた一つの見本となるものです。歴史的な敘述と理論的な敘述とか實によく一致して生々と説かれてあります。

菊版四五〇頁・總クローズ装
本文五號パラルビ付
挿繪十數個入り
定價 二圓五十錢
(本會の會員に限り特に割引の二
圓二十五錢にてお頒ち致します)
送料 二十二錢

著者の言葉

大野 法道

皇國時代人の精神生活の蠶ひとして、過去に於て力ある實績を示したわが淨土の教へを、現在から將來へかけて、一層強く廣く傳へる使命をもつ本を書かうとして、まづ私の心に去來したことは、この教へのこそといふ所を隠蔽せねばならぬが、人間の眞實のいのちに徹照せられた法然上人の信仰の淵りしられぬ深さと廣さは、たやすくそれが成しえられぬといふたじろぎぬ感

す。

歴史篇では釋尊の降誕から印度、支那、日本への佛教の歴史的な發達と理論的な説明、法然上人の立教開宗に到るまでの道程が誰人にも納得の行くやうに説明されてあります。それは同時に日本佛教發達史でもあります。更に宗祖から現代に到るまでの淨土宗の高僧が逐一説明されてありますから、これだけで既に淨土宗の大きな輪廓を深く味ふことが出来ます。

教義編は今までに見なかつたやうな整然たる秩序で讀者の前に展開されます。そして親み易い言葉で廣く深い教義を諄々と説いてくれます。か様な形式は淨土宗讀本によつて始めて見出された佛教書の一大飛躍であります。

實踐篇では日常生活と佛教との密接な結び付きが具體的な事物によつて見事に説明されてあります。歴史も理論もこの生活の中に生きてこそ意義があるので。こゝでは讀者がなる程とらなづかれることが澤山あると同時に、そらだつたのかと驚かされることが山ほど出て来るでせう。系統的な説明は精密な挿繪と相俟つて讀者の生活を直ちに豊かなものとするに役立ちます。

淨土宗讀本が持つてゐるものはこれだけではありません。これらのことはほんの一部でせう。あとは讀者自身の力によつていくらかでも良い收穫を得ることが出来る書物です。

淨土宗
管長

郁芳隨圓貌下序

金戒光明
寺法主

望月信亨台下題書

みであつた。しかしいざ着手といふ場合に
なつては、清朗の一心に立ち歸り、自信の
感激に打ちまかせ、舊來の型を離れずにゆ
るやかに湧き上る心のまゝに筆を執ること
ができたのを喜んで居ります。

編輯部だより

◆四月號の淨土に廣告を出してから
「淨土宗讀本」の申込が一時に殺到し
ました。編輯部ではあまり大きな反響
にびつくりしました。

◆ところで發行の豫定がまた遅れた
ので二重の轉手古舞ひです。が、それはサ
ボつてゐたためではありません。あまり良
心的に校正に熱中してしまつたためです。
一つの振り假名や佛教語のために數時間の
議論となつて幾つもの原典を机上に開いた
ことも珍らしくありません。

◆然しやつと校正は我々が満足するところ
まで出来ました。發行豫定日の遅延は申
謝ありませんが、「淨土」五月號と同時に「讀
本」も初夏の風をきつて颯爽と諸氏の前に
現はれます。どうぞ振つて御申込下さい。

(係)



乗^のり切^きる苦^く難^{なん}

般若心經講義(第四講)

中 村 辦 康

(六) 心經の總說

行^{ぎやう}深^{じん}般^{はん}若^{にや}波^は羅^ら蜜^み多^た時^じ、照^{せう}見^{けん}五^う蘊^{いん}皆^{かい}空^{くう}、度^ど一^{いつ}切^{さい}苦^{いく}厄^{やく}、

深^{じん}般^{はん}若^{にや}波^は羅^ら蜜^み多^たを^を行^{ぎやう}する時^{とき}、五^う蘊^{いん}皆^{かい}空^{くう}なりと照^{せう}見^{けん}して、一^{いつ}切^{さい}の苦^く厄^{やく}を^を度^どす。

僅^{わずか}かに二十^{じふ}字^じですが、此^この二十^{じふ}字^じで心^{しん}經^{きやう}の全^{ぜん}體^{たい}を^を説^{しめ}き示^{しめ}して居^ゐります。

更^{さら}に之^これを分^{ぶん}析^{せき}すると「行^{ぎやう}智^ち」と「見^{けん}空^{くう}」と「度^ど苦^く」との三^{さん}大^{だい}綱^{かう}になるかと思^{おも}ひます。

(イ) 行 智

深^{じん}般^{はん}若^{にや}波^は羅^ら蜜^み多^たを^を行^{ぎやう}するとは「觀^{くわん}行^{ぎやう}」に依^よつて般^{はん}若^{にや}の眞^{しん}智^ちを得^うること、即^{すなは}ち智^ち慧^ゑをだんく磨^{みが}いて般^{はん}若^{にや}を證^{さつ}ること、を言^いつたものであります。

こゝで特^{とく}に般^{はん}若^{にや}を「深^{じん}般^{はん}若^{にや}」とこととはつて居^ゐるのは、般^{はん}若^{にや}にも深^{しん}淺^{せん}があつて、聲^{しやう}聞^{もん}の證^{しやう}得^{とく}する般^{はん}若^{にや}と、緣^{えん}覺^{かく}の證^{しやう}得^{とく}する般^{はん}若^{にや}と、菩^ぼ薩^{さつ}の證^{しやう}得^{とく}する般^{はん}若^{にや}との三^{さん}の内^{うち}、菩^ぼ薩^{さつ}の般^{はん}若^{にや}を「深^{じん}般^{はん}若^{にや}」とし、聲^{しやう}聞^{もん}や緣^{えん}覺^{かく}のは淺^{あさ}いものとしてゐるか

らで、昔^{むかし}から
聲^{しやう}聞^{もん}——我^が空^{くう}を以^{もつ}て般^{はん}若^{にや}とす——析^{しやく}空^{くう}觀^{くわん}
緣^{えん}覺^{かく}——因^{いん}緣^{えん}空^{くう}を以^{もつ}て般^{はん}若^{にや}とす、

菩薩——諸法皆空を以て般若とす——體空觀
と區別して居ります。

つまり同じく空を悟つた智慧でも、聲聞や緣覺のは單に無執着の状態であつて、そこに積極的な活動を伴はないから、「浅い」と云はれるのです。「空」を知つても「非空」を知らないものであつて、謂ゆる獨善居士に墮ち「白眼にして世を見る」の人として、世の爲、人の爲の活動力を摩靡させてしまつて居るからいけないのです。

然るに菩薩の證悟する般若の智は、諸法（萬象）の體を有るがまゝに「空」なる姿と見るけれども、その「空」に即する「非空」即ち「妙有」の「有」として差別されたる現象を否定せず、凡ては有るべくして有つたのであるから、なるべくその正しからざる姿としては現象せしめず、正しき姿にあらしめるやう、自らにも求め、他にも勧めるものであつて、單空觀を排し「真空妙有」の中庸正しき積極生活を營まんとするのです。

ですから同じく「般若の空」と云つても、菩薩のそれは洵に複雑したもので、單に「空無」とか「非有」とか云ふ意味ではありませんので「第一義空」とか「不可得空」とか云ふやうな判りにくい言葉を使つて居るわけです。

誠に此の「空」と云ふものは、中々判り兼ねるものと見へまして、支那などでも「六家の説」と云ふものが出た位であります。

一、本無異宗

琛法師の説くところで、物の現象以前は「無」であつた筈だから「無」から「有」が出るのであり「無」の方が先であると云ふ説です。

二、即色宗

支道林の説で、現象の名は假の名ではあるが、その名に即して實相があるのであるとしてゐます。

三、心無宗

溫法師の説で、萬物は「無」の状態ではない。唯だそれに執着する人間の感情がいけないから、その心を「空」とするものであると云ふ。

四、識含宗

于法師の説で、三界は長夜の假りの宿であり、心識はその長い夢の主人公に過ぎないと。

五、幻化宗

曇臺の説で、諸現象は畢竟するに幻のものであると。

六、緣會宗

于道遠の説で、緣會する時「有」であり、

緣散する時「無」である。しかもその「無」なる姿こそ第一義諦であると。

これ等は皆な老莊の虛無主義に影響されたもので正しい理解ではないのです。

一體私達は「存在觀」を中心としものを考へようとしてゐる爲に、すべて「無」とか「空」とか云へば「存在しないこと」のやうに思つてしまつて、現にあるところの物を事を無理に否定して行かうとするので、そこに何うしても矛盾を生ずるのです。本當は「物」がそこにあつてもそれは單に「有る」のではなくして「有り續けられて行くもの」であり、たとへその變化は緩慢であつても「恒に變化して居るもの」であるとするべき「時間觀」を中心として考へて行かねばならぬのであります。

物／＼空間的存在（無變化と思ひ易い）
時間的存在（常に變化しつゝありと見る）

つまり「生命觀」の上に立つて見て行かねばならぬのに、何時も空間的な「存在觀」のみで處理して行かうとするからいけないのです。

菩薩は「生命觀」に立つて生活して行く人であります。だから凡て「物をいかす」ことに中心が置かれて居ます。

物の本當に價值を見出しその本當の生命的價值を發揮するやうにつとめます。それが「深般若」を「行する」ものであります。

また古來「般若」を「實相般若」と「觀照般若」と「文字般若」とに分けて説明してゐますが、之れなどは例の支那人の癖で何うでもいいことを分けたまでです。つまり

實相般若——般若そのもの
觀照般若——般若を悟る智慧
文字般若——般若思想

なのですから別にむづかしく思ひ過しする必要はありませんまい。

（口） 見 空

五蘊皆空

「蘊」とはかたまりのことで「存在の要素となるもの」を「物心」の二とし「心」を四に分けて合計五としたから五蘊と云つたのですが、その五蘊の集成が「私そのもの」で、その五蘊の集成を「我」と思ひ込み「自我觀念」を作つて行く爲に、色々の問題を引き起しわざ／＼生活を煩瑣にして、苦しんだり惱んだり泣いたり笑つたり怒つたり怨んだ

りして居るわけです。

だからそれを破る爲に聖道門では「五蘊皆空」と見るもので、或は「諸行無常」と云ひ或は「諸法無我」と云ふのも畢竟同じことを説明するものです。

我

心

身(物)

色蘊(刺戟を起すもの)五根、五境、無表色等

受蘊(感受)過去の経験の綜合と結合して感受す

想蘊(取像)概念の基礎となる

行蘊(作用)貪瞋等の善惡作用及び過去の認識の訂正作用

識蘊(認識)現在の認識了別

私達は先づ五蘊に依て「存在」と云ふことを知り、そしてそれは常に在るものであることを知り、自分と自分以外のものとの區別を知つて、段々此の肉體に對して自然に執着を感じるやうになります。この感受性は初めは極めてぼんやりしたものです。段々その経験を重ねるに隨つて「個在」を確認しそれに執着するやうになります。その上心の作用である「想」と「行」とで尙ほ一層之れを深く執着するに到ります。しかもその「想」と「行」とは五官に依つて得た認識そのものだけでは満足せず、その認識を支

持する者を豫想して茲に「意識」なるものを想定し、遂にその意識支保者を「自我」なりとする觀念を構成して、寢ても覺めても二六時中恒にその経験を繰り返へすので、何うしても破ぶることの出来ない強固のものにしてしまふのであります。

このやうにして「自我」の觀念は出來上がるのであります。すが、要するに「五蘊」そのものがさう思ひ込ませたまでのものであつて、云はゞ「經驗」と「認識」との集成に過ぎないものです。だから之れを分析して見れば「執着すべからざるもの」即ち「空」なる状態のものであることが諒解されませう。之れは小乗教の所謂「折空觀」で極めて初步の考へ方ですけれども、常識に訴へるために先づかうした説明方法を申し上げる譯です。それに少し面倒になりますが、一應「五蘊」を説明させて頂きます。

(一) 色 蘊

色蘊は實には五感の對象になるもの即ち色聲香味觸と、その五つの綜合に依つて抽象された「法」とを指して居るのですが、其の代表的な「色」の名を取つて「色蘊」と云ひ、聲香味觸法の五はそれに含ませて居るのです。

一、色(色彩あるもの)眼の對象

二、聲（音響あるもの）耳の對象
三、香（香臭あるもの）鼻の對象
四、味（味ひあるもの）舌の對象
五、觸（觸感あるもの）皮膚の對象
六、法（五感の綜合及び抽象）意識の對象
五感は同一なるものの異方面的觀察をなす爲の分業であつて、物そのものには大小多少の相違はありますが、色が
あり音がし、香ひがあり味があり、また觸感もあるわけ
です。だからそれを綜合する必要が何うしてもなければなり
ませんし、随つて抽象的にも想像し類推し得られもしま
す。
然し、それだけではまだ私達の意識にのることが出来ま
せん。それを感じ受する心の作用が必要です。

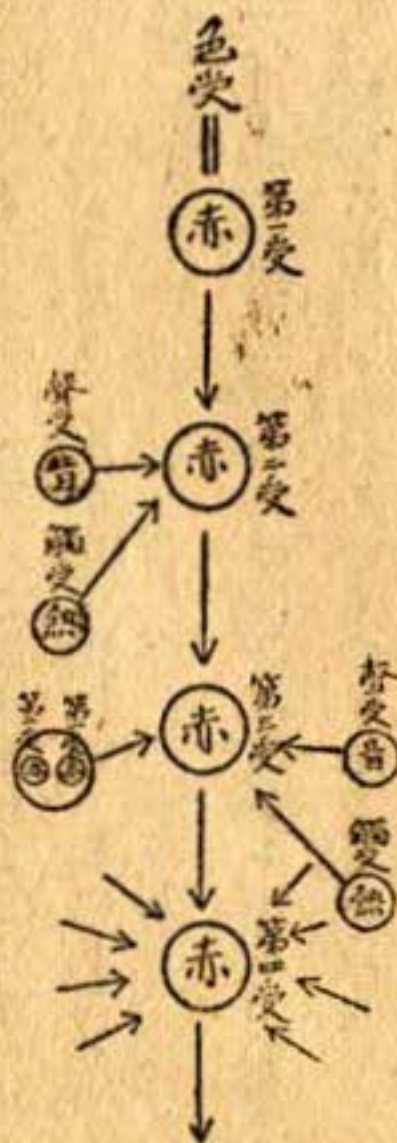
(二) 受 蘊

受蘊も別ければ六つになります。

- 一、色受（色彩と眼との和合感覺）
- 二、聲受（音響と耳との和合感覺）
- 三、香受（香りと鼻との和合感覺）
- 四、味受（味ひと舌との和合感覺）
- 五、觸受（物と皮膚との和合感覺）

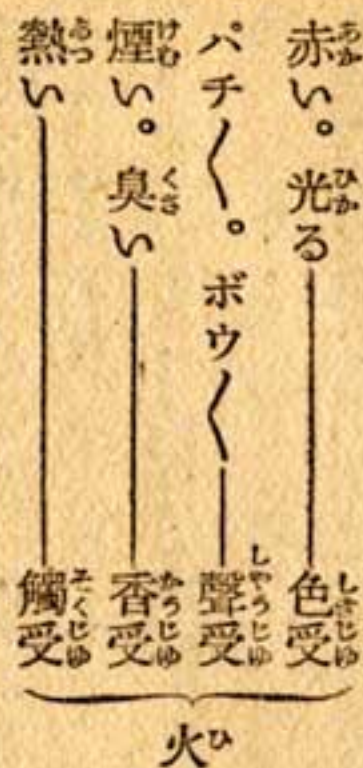
六、法受（前の五受の綜合受感）
日常に於て私達の感受は刻々に行はれるもので、到底言
葉を以てその複雑した姿を示すことは出来ませんが、私達
は赤ん坊時代から常恒不斷に經驗しそしてその經驗を積み
重ねて居るのであります。

例へば色受到於て赤色なら「あかい」と云ふ第一受を得
たのち、他の赤色の第二受の「あかい」感受を受けた時、
第一受の「あかい」とそれと結合しますが、更に第三受の
「あかい」を感じた時、第一受第二受の結合された前の經驗
とそれとが結合して段々「赤」の感覺を鋭敏にいたしま
す。それと同時にまた聲受、香受、觸受などをも受けて、
色受の第一受第二受第三受のそれ／＼に段々重ね／＼て結
合しつゝ色々と經驗を深めて行きます。



聲受到於ても香受到於ても味受到於ても觸受到於てもか
くの如くして段々經驗を積み、そしてその經驗を綜合して

行きますが、かうしたことがやがて一隅を知つて全體を悟ることにもなり「法受」が鋭敏に動くやうになります。いま假りに火の場合を考へて見るに

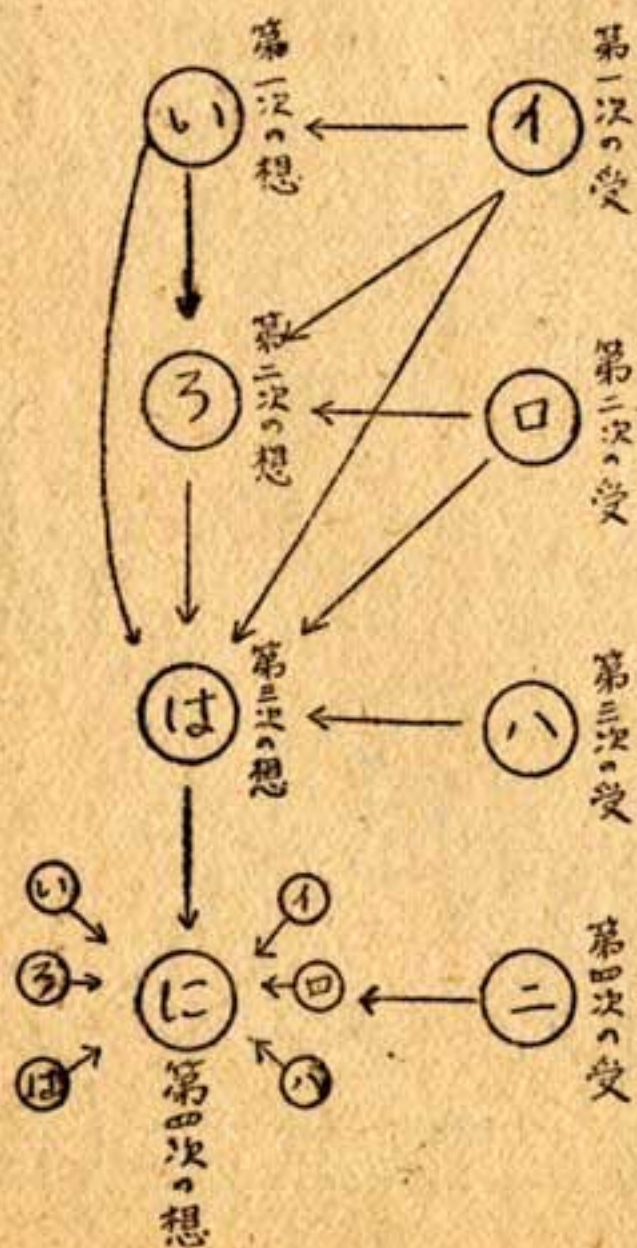


の四受が今までに度々経験されますと、色を見ただけでも「火」のあることを知り、音を聞いただけでも「火」のあることを知り、熱を感じただけでも「火」のあることを知ることになり、その火の種類をも知ることが出来ますやうに、経験に依てより高い認識を作り上げますが、かうした「受」を「知る我」と「知られつゝ行く我」とに區分して然かもそれを結びつけて、現實の「人生」と「世界」との認識を深め、茲に「人生觀」及び「世界觀」が其の人相應に構成され生育されるのであります。だから過去の経験と云ふものを非常に過信してまだ知られなかつたものに對して「不思議」を感じたり「疑ひ」を懷いたりすることが往々にして出て來るのであります。

例へば「毛蟲」と「蝶」との関係の如き、経験のない子供達に取つては毛蟲と蝶々とは同じものだと云つても中々信じませんし、またインキのこぼれる玩具で、大人が驚かされるなどは、皆な過去の経験を過信して居る結果であります。然し私達にはまだ知られて居ないものが無數にありますので、一方経験を過信すると同時に、今迄の経験を裏切られる事實に一、二度ぶつかりますと、飛んでもない「迷信」に墮ちる場合も出て來るものです。是れはまだ本當に「智」の統一が出來て居ない證據でもあるわけです。

(三) 想 蘊

前の「受」の單純感覺とその度々の経験に依る復合感覺



とが結合して、次ぎに「想」が出来て來ます。

此の「想」にも色想、聲想、香想、味想、觸想及び其の綜合の法想があるのは當然であります。

然し此の「想」も「受」の經驗範圍を出ないものですから、往々にして「受」の錯覺から謬想を起す場合があります。例へば氣壓の差に依て沸騰點は相違しますが、私達は沸騰した湯のあつさは同じ温度だと誤り思つて居るやうなものです。また齒にしみる「アイスクリーム」も「湯」も共に同じ「痛さ」を感じるやうなものです。

(四) 行 蘊

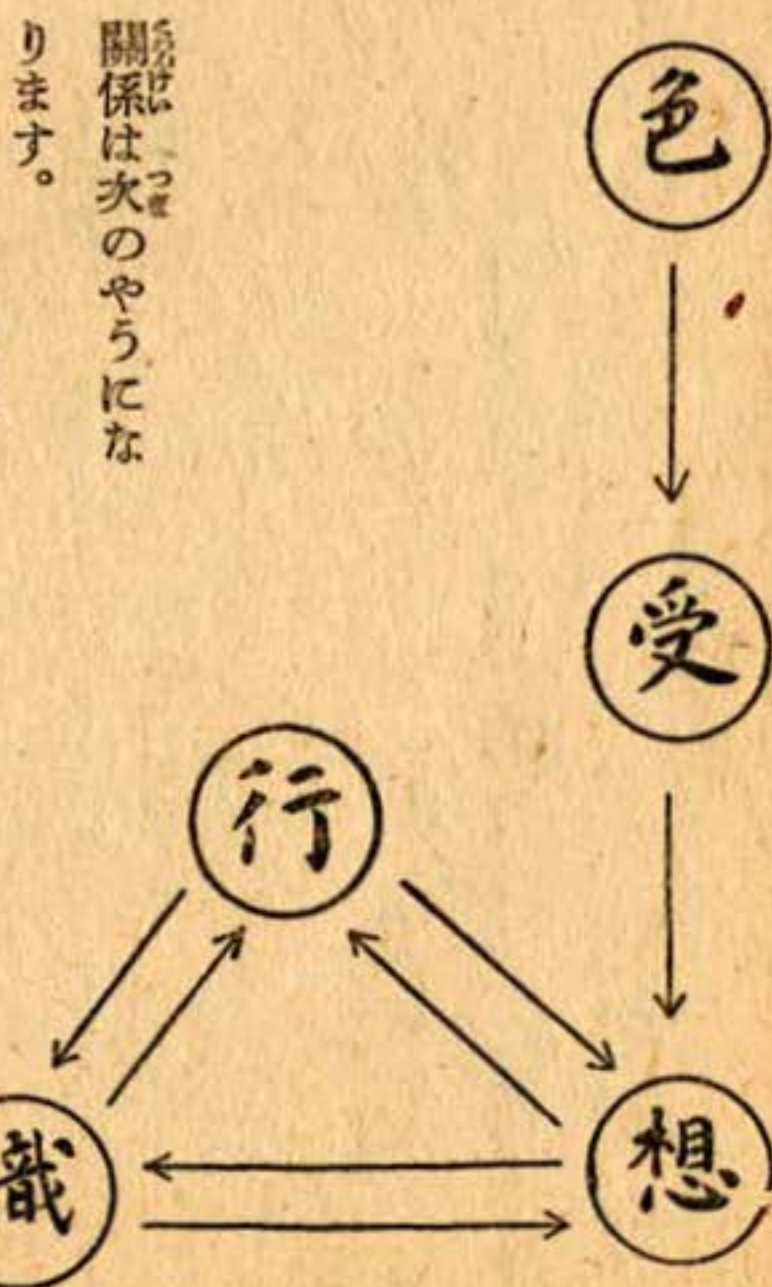
「行」とは作用であり働きであります。

此の「行」が「受」に依つて「想」を起させたり「識」を起させたりするのです。即ち「行」は検査、分析、反省、綜合等の働きを指して居るのです。やはり色行、聲行、香行、味行、觸行、法行の六種に分類されます。

(五) 識 蘊

今までの認識と現在の想とが比較了別され、それに対する検査及び分類綜合が行はれて「識」が構成されるに至りますが、其の關係は

下圖に示すやうな具合であり、また「行」と「識」との



關係は次のやうになります。

このやうに經驗の集積が「我」を形成するのでありますが、その本は過去の



無數の「受」の結合に依つて複雑した「想」が段々に呼び起されたからであります。此の「想」に依つて「行」の作用が發動し、更に「受」の現在經驗を得て「識」を起し「識」がまた次の「色」をよく分別して「受」を一層深

め、以て彌々益々「想」と「識」との範圍を廣めつゝ「自己認識」を強化して行くのであります。ですから此の色受想行識は互に關連を保つて何時もぐる／＼と作用しつゝ作用されつゝ寢ても覺めても幾多の經驗を繰り返へして「我」の觀念を持續して居るから、自我は結局「五蘊假和合」のものであると云はれるのであります。

(六) 皆 空

既に「假和合」とも云つて居るやうに、凡ては經驗の集積に依る結果に過ぎないのであつて、決して固的存在ではなく眞相は常に變化し行くものなのであります。

即ち前に申しましたやうに、私及び私以外の何ものも、それを存在的に見ずに「時間的變易」として見て行かねばならぬ筈のものです。然るに此の「生命的存在狀態」のものを單に固定的な「空間的存在」とのみ見て居るから、正しく生活するには何うしても其の根本觀念を打ち破らねばなりません。之れを徹底的に打ち破らなくては何時までたつても迷想迷識に縛られて、物事を正しく見ることが出来ませんし、正しく生活することが出来ないのです。この故にこそ私達は常に苦惱に悩まされつゞけてゐるのでもあります。

それで、之の考へを訂正せしめるには勢ひ強く否定的な言葉を用ゐなければなりませんから、或は「空」とか或は「無我」とか云ふやうな言葉を使用しなければいけなかつたのでせう。

然し「空」と云つても前にも繰り返したやうに「何もない」と云ふ意味ではありません。つまりは無の二邊見を離れろと云ふ意味であります。言葉をかへて云へば存在觀的考へを捨て、生命觀の上に立てと云ふのであります。

之れを今宗教的に申しますならば、一切をおかけと見て、それを有り難く活すやうにすることとあります。一切は三寶の集りであり、貴い生命の流れであると有り難く頂いて、決してそれに執着することなく之れを尊重し之れを育成するやうに努めて行くのが「空」の目的に適ふものです。

(八) 度 苦

かうした見地に立つて生活しますならば、一切の苦惱厄難と云ふものは解消されてしまひます。苦厄もまた有り難いおかげであり貴いいのちであるからであります。

一體苦厄とは

内苦／＼身苦／＼病氣身勞老衰
心苦／＼憂愁嫉妬等／＼苦

外苦

盜賊其他
風雨寒熱等の災害

厄

であります、何事も一切は天地進展の爲の現象であつて、丁度川の水が流れるのに色々な障害にぶつかつて、或は淀んだり或は渦を巻いたり、或は岩にぶつかつたり、或は塵埃をなげこまれたりしながらも、素直に出来る範圍で流れに流れて行くやうなものでありまして、凡ては恩寵でありおかげであり試練であると思つて、力の及ぶだけに爲すべきを爲して行きさへすれば其處におのづから淨樂の世界涅槃の世界が開ける筈であります。即ち之れが般若波羅蜜多することであります。古歌に

水鳥の行くもかへるも跡たへてされども道は忘れざりけり

とありますが、道は一筋であります。殊に淨土教の信仰は何事も如來様に御委せして居るのですから、何んな苦勞も災難も如來様の仰せのまゝに、念佛の中に誠實に處理して行けばよいのであります。

照見五蘊皆空——方法——般若
度一切苦厄——目的——波羅蜜多

S.S.S.

金のハニベ
亂賣にニベ

金合スエンス
！をニベ



¥150以上

筆年萬合金・スエンス ★

死後は何うなる？

淨き友の會座談會

江角氏「法然さまが、露の身は

此處彼處ちり／＼に死なうとも同じ極樂の蓮の臺の上に生れること

が我らの心願ぞ、と歌はれたと

のことでしたが、私は此頃、寧ろ

此の世は此の世限りと考えた方が

よいのではないか、死後に魂が

存続して同じ處に往けるとか再會

出来るとか言ふのは果敢ない我々

凡夫の希望であつて、寧ろ斯かる

事はあり得ぬとあきらめた方が寂

しい乍ら安住が出来るのではない

か、在りし日の事どもを偲び、追

憶と感謝に暮れゆく日常の中に生

き残つた者の生活の安らぎが見出だされ得るのではないか、とも思ふのですが……」

中村師「前の座談會（淨土五ノ

十一號）で話の出た魂の存続と

か再會とかいふ問題は、迷悟の區

別を判然として考へないと混雜し

て了ひます。

迷の世界は有ですが悟りの世界

は有無を超越した世界です。輪廻

相續は前者の姿です。迷の世界に

ついてみるならば、所謂四大乃至

五蘊が假和合してその統合の姿が

我の相をなすのであつて、我の存

續の相が輪廻と呼ばれる如き有様だといふ、そして斯かる輪廻流轉相は業の力に依つて惹起さるゝといふのである。

人は或は考へるかも知れぬ、昨

日の我と今日の我とに何の差異が

あらうと。然し昨日と今日の縁は

異なる。肉體に於ても精神に於ても

生長があり衰退がある。昨日の味

方も今日の敵となるのが、此の世

の常である。

そこで、それなら過去の五蘊假

和合の姿をAとし現在のそれをB

とし未來のをCとすると、ABC

は各自異つた相を示し、従つてその間は無關係ではないかと思はれよう。

實に現世は現世丈けといふ

謂はゞ三世各別無關係説と言へる

でせうが、三世の意味を論理的に

過、現、未、の三時と、乃至はそ

の論理的延長と考へるならば、三

者の關聯は自ら理解出来るでせ

う。

今日の私は既に昨日の私ではな

いけれど、然し、無關係ではな

い、昨日迄の私の生活努力があつ

て今日の自分が今日の縁の上に存

立する。昨日の願官が今日は圓圖

の人となる、それもその人の過去

業の然らしめた所であり、今日衆

縁順熟してその果報を受けたに過

ぎぬ。

瓜の蔓には茄子は生らぬ。あの

小さな杉の種には天を摩する喬木

となる可能性、生長力が存する。前業の力が内在してゐるのである。

けれども亭々たる深山の杉の苗が、人里に育てられても親木以上に果してなれるか。なれることもあり、なれぬこともあらう。それは條件次第である。杉の苗種は因で諸條件が縁である。

同じ親木の苗種でも夫々の條件が異り又その生長してゆく情況が相違する。好條件に恵まれれば親以上の森々たる大木にもならう。たとへ同一の業力を内在してもそれに加はる諸條件の力が現象としては異つてゐる。

菅原傳授手習鑑ではないが松王梅王櫻丸皆各別の道を歩んでゐる。兄弟でも二子でも皆その現實相は異なる。

單に五蘊假和合、諸要素結合丈

けの現象界ならば、斯る各別の果報が生ずるのは如何なる譯であらう。

我々の周圍の現象は皆一定の秩序の下にあり、因果の理法に従つてゐる。たとへ如何に複雑化してゐやうと人間界のみ無秩序であつてよい譯がない。人間界に於ける差別相も因縁の相違の上であり、前業の存続する力の相違に由來してゐよう。今日の自らの貧窮は昨日の榮耀の結果であるとしたならば、今世の苦難は前世の業報と見るに何の不思議があらう。

勿論人間界の前業には家庭乃至社會關係とその歴史的諸關係とが含まれることであらう。單なる縁の因果許りでなく横の縁起も綾なされそれに相對的な對人的諸關係も入り歴史社會的諸因縁が附加されるのであるから、單純な説明

過程を以ては理解困難と思ふが、要するに個在の生命存続はよしんば五十年としても業力は存続しその果報は現實の上にやがて現象し來るものである。

その業報が現世に於て直に現はれることもあらうし（順現業）、親の因果が子に報ひの類で次生に於て現はれるもの（順次業）、または順生業、又隔世遺傳みたいに一世代置いた次の世代即ち三世に於て報ひを受くるもの（順後業）または順次生業等、様々ではあらうがしかし何時の日にか因果はやがて廻る小事の如く廻り來るものといふ。

かう申しますと此の世の苦勞もすべて前世の約束事なのだから、何事も自分の力に及ばないきめられたことなのだからいふ意味にとる方もありませうが決してさうで

はありません。

釋尊時代にも、無因無縁を主張するものと、宿命的業報説を説なへるものと、天意・天力説を説くものとの三者があつたそりです。釋尊は之らを何れも激しく否定されました。何故なら、それらは無秩序と無道德と無自由意志の論に傾くからです。何れの佛も業論者、業果論者、精進論者であつたのだと經典にありますやうに、佛敎の業論は悟への精進を奮起せしむる底のものでなくてはなりません。業力の相續に依つて、迷の世の苦と惑が生起する。

人生はかくして惑業苦の轉々流浪の相であることを率直に認めることが肝要である。それは迷生苦命の姿である。

此の迷苦を脱出するには如何にすべきか。業力を斷切ることであ

り、その根となる煩惱を斷盡することであり、無明の惑を斷つことである。その爲に、十二緣起、八正道、三學等が説かれるのである。かくて根本無明を打破する時始めて惑業苦の繋縛破れて眞生正命が實現する。ところで此の根本無明・根本惑とはどんなことかと言ふと、つまり、我々の拔去難い我執を指します。人間のあらゆる迷も罪過も凡て此の我執から生ずる。

元來我は五蘊假和合の統一相に過ぎぬのに、我々の生活に於て自他の差別相に執着して行くところに、苦樂斷常有無の迷の世界が現はれるのである。眞實には無我であり、無我所有であることを了知すべきである。無我といつても我無しといふ意味でなく、我と執着すべきものはないとの意であるか

ら、又一に中とも呼び、無と異る故に空とも言ふのである。

生命は刻々に變化する。生命現象の一統一相たる我も從つて變化遷展してゆくものである。一切は無常なのである。一として固定したるものはない。それを個在と執し不變と着し、そして死せば無になるとする。それは執はれた考へ方である。

生命は流れゆくものである故に、消極的には執着すべき何物もないことになり、積極的には全力を盡す生活となる。所謂獅子奮迅三昧である。それが出来ぬから念佛生活に依る他はない。

有無を立つる考へ方は個人主義の小生命中心のものである。阿彌陀佛の大生命に觸れるとき、有無二邊を離れた無執着の生活が現成し來らねばならぬ筈である。自ら

の小我の力に頼む時、迷と執着があり、小我を捨てて永遠の生命なる無量壽光如來に歸依しまつる時、眞生正命が樹立せられるに至る。

法然上人も彌陀の本願に歸依しまゐらせて救にあづかることが出来る」と申して居ります。そして救の世界は迷の世界が各人各様の業報に苦むと異り斯る個我中心の差別相を斷切した同人和合の世界でありますのみならず、個我の力で參るのでなくみ佛の大御力で攝取せられるのですから「生けらば念佛の功つもり死なば淨土に參りなむ、とてもかくても此の身には思ひ煩ふことぞなき」と、大安住の生活が出来る譯ではないでせうか。」

平野氏「しかし貧富の差別も超越出来ないだらうか。少くとも信仰に入ればそんなことは問題でなくなると思ふ。」

石川氏「千差萬別の世界も信仰に入れば同一になると思ふ。また不幸將して不幸か、人に依れば不幸に依つて信仰を獲る者も、また奮起一番する者もある。さすれば不幸轉じて幸となると言へる。」

中村師「金持必ずしも幸ならず、貧者必ずしも不幸ならず、人間の生活の豊かさや幸はせとは、必ずしも差別相に依てはゐない。粗衣粗食、而も天地の大道を邁歩して幸に生きる人もあり、美衣美食して一日も安きを覺えぬ人もあらう。我執に纏繞たるかが否かがその別れ途となるでせう。」

江角氏「お話で少し分つて來たやうに思ひます。實は最近に友人

の家不幸がありまして、何とか慰めて上げたいと思つたのですが、自分がまだよく分つて居らぬので言葉に困る次第ですが、人間が生れて直ぐ死ぬ者もあり、百歳の長壽を保つ人もあり、それにはやはり何か前世の約束事と言つた過去世の因縁づけをば信ぜずには居られぬ氣もしますが、又翻つて思ひますと、私には寧ろ心經の五蘊皆空度一切苦厄の方が理窟になるやうに受取れる、色即是空空即是色、空より來り空に歸するといふのか、本來空なのだと覺する方が苦が輕くなる氣がするのです。が間違つてゐませうか。」

中村師「空は根本的な迷を打破する思想で空・無常・無我は一連の同似思想なのです。何れも縁起を土臺としてゐるものです。我々は永遠不變のものと執し易い我

陸海軍病院慰問

雜誌 淨土寄附者芳名 (敬稱略)

金壹圓貳拾錢	釧路市米町	福山仙太郎
金拾圓	大阪市田邊本町	中易善三郎
金壹圓貳拾錢	臺南斗六街	揚清香
金貳圓	府下三鷹町	深山家
金壹圓	神戸市須磨浦通り	松澤清三郎
金壹圓	和歌山有田郡	西ヶ峰婦人會
金壹圓貳拾錢	同	福井松枝
金貳圓	愛知縣前芝村	前芝村有志
金貳圓	兵庫縣精道村	池田吉兵衛
金貳圓	奉天西安縣	西安寺
金貳拾五圓	福岡縣善導寺町	宗學院第八回卒業生
金壹圓	市川市菅野	小島エツ子
金壹圓貳拾錢	小樽市都通リ	第一銀行支店
金壹圓貳拾錢	同	京屋商店
金壹圓貳拾錢	同	平井善慈
金壹圓	滋賀縣玉緒村	安樂寺
金貳圓	品川區元芝町	笠松廣太郎

を構成し、凡てを自己中心に考へてゐる。しかし、我にしる何にしる永遠不變のものは無い、至て天地の靈が集つて出來てゐる。不變固定ではない。而も自ら不變でありたいと思ひ、不變であると執してゐる。そこに根本的な迷の土臺がある。寢ての覺めても我といふ栗のいがの中にゐる。それが破れて空無我といふ時、唯何もないのだといふ單空といふ思想を生じ易い。所謂虛無的思想である。でなければ道教などのやうな何もせぬぶら／＼したといつた消極的頽廢的な思想に陥り易い。空無我もその眞意に徹せぬと間違ふおそれがある。

禪宗でも見性成佛といふ。唯識自性清淨心で天地一つになつたとの體驗内容で、その時空を悟り無我を悟るといふ。それも單空に陥

り易い。禪宗でも魔道といひ一色
趣に入つたといふ。天地と我と同
體なりといふ考へから釋迦何人ぞ
我何人ぞといふ心が起れば、そこ
に魔道が生じ、野狐禪となる。

一體空といふのは般若の思想で
す。小乘的な空の思想、折空觀
とは少し違ふ。

折空觀とは、家を壊せば柱と

なり木片となる。我も亦四大和合

五蘊假和合で、やがては寂滅とい

ふのが折空觀である。般若空觀

に於ては、斯る空は今一度空じ

て、空空、畢竟空、勝義空、第一

義空、大空、十八空等といふが、

空に徹するはそれ程困難である。

空と執着すれば既に空ではない。

我々凡夫、日常百般の生活をし

てゆく者にとつては、何々空には

徹し難い。殊に現に社會生活をし

てゐる者にとり、それは難しい話

である。

それでは、どうすればよいか。

又、御質問の意味は何と心得て行

くべきか。仲々難しい問題です
が、次にそれについて申述べませ
う。」

(未完)

五月號表紙の説明

法然上人の御眞筆

表紙の地模様は選擇本願念佛集
の數多い異本(七十餘種に及ぶ)
の中で最も有名盧山本(國寶)と
いはれる草稿本の一部である。
(藤尾祐範氏編「選擇集大觀」
による。)

いふまでもなく選擇集は法然上
人が建久九年にお著しになつたも
ので、實に淨土宗を開宗するにつ
いての宣言書である。この選擇集
が初めて版本となつて一般に披露

せられたのは、上人御入滅の年で
あつたが、これが一度當時の人々
に讀まれるや世論は囂々としてゆ
き、中でも嘉祿年中には選擇集の
印版を集めて來て、叡山の大講堂
の庭で焼いてしまつた等といふ亂
暴な話もあつたが、一般の人々は
そんな攻撃や迫害を外に、選擇集
はますます普く行きわたり、無明
長夜の大明燈として、如來の經法
にもまして尊重されて行つた。

一般に盧山寺本と稱せらるゝも
のは、選擇集の草稿本であつて、
明治四十二年國寶に編入せられ
た。この本は、後水尾天皇の御
覧覽なつたもので、天皇は本が甚
だしく破損してゐることを、歎き
給ひ、修綴を加ふべきの勅令を賜
つたが、この本が各紙の兩面に筆
寫してあるため修綴することが出
來なかつた。しかし九十餘歳の高
齡になる大經師權之助の老母が、
丹精を凝し、一紙を二枚に辨がし
て修補を加へたといはれてゐる。
この本の最初の二行、「選擇本
願念佛集、南無阿彌陀佛往生之樂
念佛爲先」の字は法然上人御自筆
のものである。
まさしく上人の御自筆であると
いふ點で忘れられぬ本である。

(編輯部)

編輯後記

◇ 激刺と躍動し、スク／＼と伸びる季節となつて、會員諸氏の御健勝を祈ります。時局はますます腰を据えてかゝらねばなりません。われ／＼は物資の缺乏に耐え國策に副ふべく努力を要します。前線の勝利を銑後で實を結ばせる覺悟が肝心です。

◇ 吉田絃二郎先生の相變らぬ御後援に深謝いたします。村田常夏氏の「俊來坊重源」は高僧の遺薰郁たるものがあります。又米倉隆從氏の「部落を歩く」は事實中支に長くゐられただけあつて、中支の風景を目で見る心地がします。◇ 本號では未完のものが「東洋の微笑」「死後は何うなる」の二つも出来ましたが、紙数の關係でしたもので御諒承を願ひます。

◇ これまで「會員の聲」として會員諸氏から色々の記事や通信をいただいたてゐましたが、種々の事情で割愛してゐましたが、今後は出来るだけ掲載しますから、精々御通信願ひます。本號は瀧澤運道のもののみ載せました。

◇ 目下、庶務、組織、會計、編輯の各部を擧げて諸整理に没頭してゐます。この整理中各方面の會員諸氏から種々御忠言をいただき感謝してゐます。今後とも何事に拘らずドシ／＼御申し送り下さるやうお願いいたします。又雑誌不着や住所變更等の場合は成るべく早くお知らせ下さい。

◇ 淨土宗讀本は大變な人氣を呼んで申込みが殺到してゐますが、刊行が豫定より遅れて申し譯ありません。しかし本を手に入れられれば成程標準とすべき決定版だと思つていただけるものと信じてお詫びに代えます。

◇ 本會出版物の御註文は振替郵便が御便利です。振替口座番號は

東京八二一八七番

◇ 御註文の場合は種類、部數、代價を楷書で明瞭に御書き下さい

ますよう。尚送料をお忘れなき様お願いいたします。

◇ 勝手乍ら代金引替は一切お断り申上ります。

◇ その他の問合せは往復はがきかまたは返信料同封で、御願ひします。

◇ 會員で御住所御變更の方は現御住所と共に前住所をも御明記の上御通知下さい。

◇ 本誌掲載の廣告は一切左の店で取扱つてをりますから廣告掲載御希望の向は直接その方へ御問合せ願ひます。

本誌廣告一手取扱

株式 正路喜社

東京市京橋區銀座西七丁目
電話代表銀座 五七六六

淨土 五月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和十五年四月三日印刷納本
昭和十五年五月一日發行

(定價十二錢)

編輯兼 眞野 正順

發行人 赤尾 光雄

東京市牛込區市谷加賀町一ノ二二
印刷所 大日本印刷株式會社

發行所 法然上人續仰會

東京市芝區芝公園明照會館内
振替東京八二一八七番

「淨土」購讀規定

一部定價 金十二錢

(送料五厘)

會費 金一圓二十錢

一ヶ年 (送料不要)

浄土宗管長

郁芳隨圓猊下序

大野 法道
中村 辨康
前田 聽瑞

共著

菊版四五〇頁・總クロース装

本文五號バラルビ

挿繪寫眞入

定價二圓五十錢

送料二十二錢

浄土宗讀本

浄土宗の教義は？ その實際は？ その歴史は？ その現狀は？ つま
いま浄土宗が持つ凡てのものを、萬人に解るやうに、立派な體系のもとに説
いたのがこの讀本です。しかも執筆者は現浄土宗の第一流理論家と信仰家で
永く後世に残る定本とするために何回も何回も協議を重ねて、苦心練磨の結
果出来上つたものです。校正も印刷も製本も慎重を期してやりました。です
から、信頼して讀める上に、浄土教義に就ての正しく廣い智識が得られ、書
架に飾つて恥しからぬ書物です。正しい教義・信仰を求められる人、浄土教
に就いて知り度い人々は勿論、宗教とは何かと迷はれてゐる人、時局下僧俗等
しく自己の信仰を確固たる體系の上にすへるために讀んで頂き度い讀本です

一家に一本！
明るい家庭！

發行所 法然上人鑽仰會

東京市芝區芝公園明照會館
振替東京八二一八七番

——浄土宗讀本——内容——

第一編 歴史

- 第一章 釋尊の生涯
- 第二章 佛教の發達
- 第三章 法然上人傳
- 第四章 二祖から現代まで

第二編 教義

- 第一章 浄土の教義
- 第二章 信仰の對象
- 第三章 西方の浄土
- 第四章 信仰の獲得
- 第五章 念佛の意義
- 第六章 信仰の生活

第三編 實踐

- 第一章 生活義としての念佛
- 第二章 信仰を方向づける爲の宗派と寺院
- 第三章 寺院の構成及び機能
- 第四章 信仰修養に必要な諸準備
- 第五章 信仰修養法としての行儀
- 第六章 人生の最大儀禮
- 第七章 祖先への報恩行
- 第八章 信仰増進の方法

法然上人鑽仰會刊行圖書

東京市芝區芝公園明照會館
振替口座東京八二一八七番

中村辨康著

(四六版一三〇頁總ルビ付)

法然上人の信仰生活

定價三十錢
送料六錢

中村辨康著

(四六版八〇頁總ルビ付)

信仰讀本

定價二十錢
送料三錢

藤井實應編

菊半截一四四頁
總ルビ付

法然上人法語抄

定價三十錢
送料六錢

佐藤春夫著

特製ノート型、天金
十二ボ總ルビ、三〇〇頁

法然上人
別傳 掬水譚

定價四圓五十錢
送料二十二錢

中村辨康著

(四六版七〇頁總ルビ付)

講話一枚起請文

定價十錢
送料三錢
(品切)

大野法道著

(四六版六〇頁總ルビ付)

法然上人

定價十五錢
送料三錢
(品切)

中里介山著

(三六版二五〇頁クロース裝)

法然上人傳

定價六十錢
送料六錢

佐藤春夫・吉田絃二郎・岡本かの子
倉田百三・都芳隨園著

(四六版總ルビ付)

我が信仰

定價六錢
送料三錢

法然上人鑽仰會編

(菊版一一〇頁總ルビ付)

念佛讀本

定價二十錢
送料六錢

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回二日發行)
昭和十五年四月廿日印刷納本 昭和十五年五月一日發行

淨

土 第六卷 第五號

定價金十二錢(送料五厘)
滿鮮臺等外地定價金十三錢